

元総社蒼海遺跡群 (141)

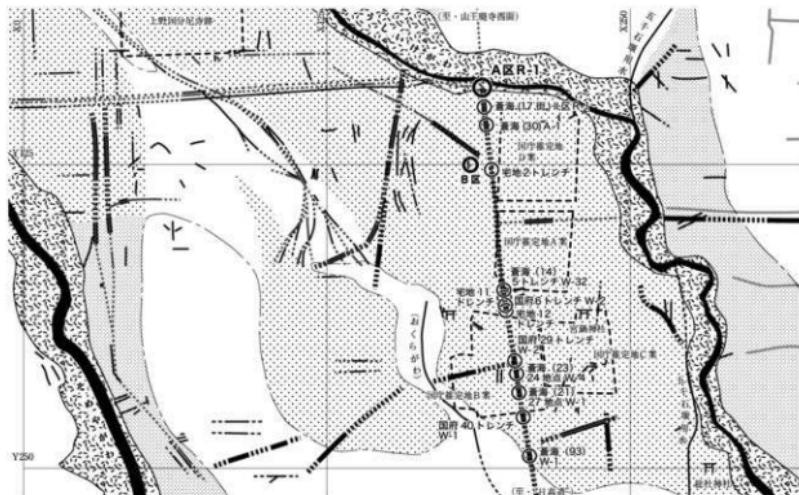
前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 0. 10

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群 (141)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2 0 2 0 . 1 0

前橋市教育委員会

【解説】

前橋市教育委員会2017、中村2018で検討した、元経社舊海道路跡周辺で調査された古代の溝跡と道路状遺構に、本道跡A区R-1号道路状遺構の位置を示した。粗い網掛けは微高地、細かい網掛けは自然堤防、不規則な網掛けは低地平野、淡色の線は溝跡、淡色の線は道路状遺構と硬化面、破線は推定走向方向を表す。

この道路状遺構は巨視的には、近藤1981によって指摘されている山王庵寺西側の南北古道と「日高道」の中間地点に位置している。牛池川の浸食崖に接する本道跡A区では、深さ約30mにおよぶ切通しを開削し、一部砂礫敷きの斜路を作造することで、対岸へ渡河していくようだ。このような、谷や川も克服しながら小地域間を直線的かつ平坦に結ぶる広域的な計画性に、この道路状遺構の意義を推測することができる。



A区R-1号道路状造構 全景（上が北）

卷頭図版2



A区R-1号道路状造構 土層断面（南から）



A区R-1号道路状造構 全景（南西から）



A区R-1号道路状造構 砂礫敷き検出状況（南から）



A区R-1号道路状造構 砂礫敷き断面（南から）



A区R-1号道路状造構 As-B直下地表面の状態（南西から）

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、統く律令時代になってからは元総社・元総社地区に山王庵寺、国府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群(141)は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、国府に関連すると考えられる「切通道路遺構」が発見されました。これまでの発掘調査で得られた成果が少しずつ積み重なり、徐々に「国府の解明」に近づいています。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができます。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和2年10月

前橋市教育委員会
教育長　吉川　真由美

例　　言

1 本報告書は前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（141）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	元総社蒼海遺跡群（141）
調査場所	前橋市元総社町 1811-3、1812-1、1860-1、1860-2、前橋市総社町 3090-4、3090-9、3090-10、3090-12、3090-13、3091-1、3091-2、3091-3
遺跡コード	2 A 255
発掘・整理担当者	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和2年6月12日～令和2年7月20日
整理・報告書作成期間	令和2年7月21日～令和2年10月30日
3 本書の原稿執筆は1を小峰 篤（前橋市教育委員会）、他を中村が担当した。	
4 発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである。	
（発掘調査）池田正恵 伊丹茂一 大山四郎 川野京子 木暮朱美 小林克宏 後藤次雄 塩野谷和夫 高見壽美子 永井憲一 平澤小夜子 星野一江	
（整理作業）大川明子 石川承子 小林 和曾根 祐 杉田友香 土屋利治 福島様子 細野竹美	
5 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課で保管している。	
6 下記の諸氏および機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。	
後藤圭一 関 茂雄 高橋清文 永井智教 中島啓治 中村正八 野村 満 吉川和男 山下工業株式会社	

凡　　例

1 押図中に使用した北は座標北である。

2 押図に国土地理院発行1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3 遺構名称は、住居跡：H、溝跡：W、道路状遺構：R、土坑：D、ピット：P、性格不明遺構：Xである。

4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構 住居跡・溝跡・土坑・ピット・道路状遺構・その他・・・1/60 カマド・・・1/30

全体図・・・1/150、1/250

遺物 土器・石製品・瓦・・・1/3、1/4、1/6 金属製品・・・1/2

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。遺物の単位はcm、遺構の単位はm表示。

6 遺構図・遺物実測図のトーン表現は以下のとおりである。

遺構 焼土範囲：■ 黏土範囲：■■■ 灰範囲：■■■ 硬化面範囲：■■■ 地山：■■■■■

遺物 須恵器（還元焰）断面：■■■ 須恵器（酸化焰）断面：■■■ 灰釉陶器断面：■■■■■

灰釉施釉範囲：■■■ 研磨範囲：■■■

7 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間 A テフラ：1783）、As-B（浅間 B テフラ：1108）、Hr-FP（榛名ニッ岳伊香保テフラ：6世紀中葉）、Hr-FA（榛名ニッ岳洪川テフラ：6世紀初頭）、As-C（浅間 C テフラ：3世紀後半～4世紀中葉）

目 次

巻頭図版 1・2

はじめに

例言・凡例・目次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	1
III	調査の方針と経過	
1	調査範囲と基本方針	7
2	調査経過	7
IV	基本層序	9
V	遺構と遺物	
(1)	堅穴住居跡	9
(2)	道路状遺構	13
(3)	溝跡	14
(4)	土坑・ピット	15
(5)	性格不明遺構	15
(6)	遺構外出土遺物	15
VI	発掘調査の成果と課題	26

挿図目次

Fig 1	遺跡の位置	1	Fig.12	A区D-1～9号土坑、B区W-1号溝跡、 B区D-1・3・5号土坑	22
Fig 2	周辺道路図	3	Fig.13	A区P-1～18号ピット、B区D-2・6～8号土坑、 B区P-1～9号ピット	23
Fig.3	周辺調査地点とグリッド設定図	6	Fig.14	A区H-1～3、A区R-1、B区H-1～3出土遺物	24
Fig.4	全体図	8	Fig.15	B区H-4～6・7、B区D-2出土遺物	25
Fig.5	基本層序	9	Fig.16	A区R-1号道路状遺構の勾配	26
Fig.6	A区H-1・3号住居跡	16	Fig.17	A区R-1号道路状遺構の推定路線と関連遺構	28
Fig.7	A区H-2、B区H-1・3号住居跡	17	Fig.18	着海城築城以降における地形変更の想定6～9地点付近	30
Fig.8	B区H-3～6号住居跡、R-1号道路状遺構、 X-1号性格不明遺構	18	Fig.19	A区R-1号道路状遺構の出土土器	30
Fig.9	B区H-6・7号住居跡、A区R-1号道路状遺構	19	Fig.20	A区R-1号道路状遺構砂礫敷き偏光顕微鏡写真	32
Fig.10	A区R-1号道路状遺構	20			
Fig.11	A区R-1号道路状遺構、W-1号溝跡	21			

表目次

Tab.1	周辺道路一覧表	3	Tab.3	出土遺物観察表	25
Tab.2	土坑、ピット計測表	15	Tab.4	関連遺構等一覧	27

写真図版目次

PL.1	A区全景（上が北） B区西半部全景（上が北） B区東半部全景（上が北） A区H-1全景（南西から） A区H-1カマド全景（南西から） A区H-2全景（北西から） A区H-3全景（北東から）	
PL.2	A区R-1路面①（新段階）検出状況（西から） A区R-1路面①（古段階）検出状況（西から） A区R-1西壁中段平坦面検出状況（南西から） A区R-1東壁中段平坦面検出状況（南西から） A区R-1As-Kk直上馬骨出土状況（南から） A区R-1調査風景（北西から）	
PL.3	A区R-1路床検出状況（西から） B区H-1全景（北から） B区H-2全景（西から） B区H-2カマド全景（西から） B区H-3全景（北西から） B区H-3カマド全景（西から） B区H-4東半部全景（南西から）	
PL.4	B区H-4西半部全景（北西から） B区H-4カマド全景（西から） B区H-5全景（北から） B区H-6全景（西から） B区H-6カマド全景（西から） B区H-7全景（南から） B区D-2全景（南から） A区調査風景（北東から）	
PL.5	遺物写真	

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、22年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和2年4月10日付で前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することになった。同年6月2日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査着手に至った。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（141）」（遺跡コード：2A255）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「（141）」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。



Fig.1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 (Fig. 1・2、付図) 元総社町は前橋市の南西部に位置し、元総社蒼海遺跡群は、その北西側を占める。遺跡地は1960年代まで主に畑地だったが、1998年から始まった元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって急速に市街化が進み、今では大型店舗やマンションも建ち並ぶ、現代的な街並みへと変貌を遂げつつある。

遺跡地は、相馬ヶ原扇状地と前橋台地の移行地帯にあたり、牛池川と染谷川で画された、南北に長い台地上にある。約2万年前、浅間山の山体崩落により生じた前橋泥流は、前橋台地の母体となった。この頃の元利根川は、現利根川よりも西側の総社や元総社の辺りを流れていると考えられる(早田1990)。約1.7万年前、榛名山の山体崩落により生じた陣場岩屑なれば、相馬ヶ原扇状地を形成した。約1.4～1.3万年前頃には前橋泥炭層が形成され、遺跡地の周辺は針葉樹林や草本類が繁茂する環境下にあったと考えられる(早田2000)。相馬ヶ原扇状地を水源とする染谷川・牛池川・八幡川などの中小河川は榛名山の裾を南東へ流れるが、元利根川が残した低地の影響を受け、遺跡地周辺で流れを大きく南へ変える。急激な流れの変化は洪水の温床となり、度重なる洪水層の堆積によって、遺跡地の周辺には総社砂層が形成されたと考えられる(日沖2016)。総社砂層の堆積と中小河川による開削の反復は、微高地と低地を残しつつ台地を形成した。台地が安定すると、中小河川の流れも現在の場所に落ち着き、今日まで下刻を続けている。その後、台地上には黒ボク土が形成され、歴史時代に起きた度重なる火山災害や人為的な地形変改の累積を経て、台地表面は次第に平坦化してきたと推測できる。

歴史的環境 (Fig. 2・3、Tab. 1) 紙数の都合上、本節では元総社蒼海遺跡群を中心に、歴史的環境を概観する。

総社砂層より上層で確認される最も古い遺構は現在のところ、縄文時代前期に遡る。該期の住居跡は、蒼海遺跡群（3・4・40・41・94街区幸以下「蒼海」）などで確認され、染谷川左岸の自然堤防に沿って帶状に分布

する。中期の住居跡は、蒼海（3・40・116・123）・小見内Ⅲ遺跡などに確認される。蒼海（10）を除くこの一帯は、染谷川自然堤防の北端と、榛名山南東裾の最末端にあたり、広い微高地が展開する。後期～晚期の遺構は少ないが、蒼海（10・101）に確認され、遺物は蒼海（100）・小見Ⅴ遺跡などにも確認される。台地内の谷地や中小河川の低地にも、この時期の遺構は分布する。本遺跡では、わずかながら前期の土器片が出土した。

弥生時代の遺構は少ないが、前期末～後期の遺物は、蒼海（37・39・61）・小見内Ⅲ遺跡などで出土しており、現状の分布は台地の北端をなす牛池川右岸の一帯に集中する。

古墳時代前期の遺構は、蒼海（38・39・17街区）・小見内Ⅲ遺跡のように、前代の分布を踏襲する。他方、蒼海（40・48）など染谷川の自然堤防上と、蒼海（38・56・61）など牛池川左岸の一帯にも分布する。牛池川左岸では集落域のはか、蒼海（128）で畠跡、低地平野内の関泉明神北IV・V遺跡などで水田跡が確認され、蒼海（62・81・100）などには周溝墓が推定されており、集落域・生産域・墓域を含む、一体的な生活の単位が確認されつつある。中期になると、牛池川の一帯では左岸を中心に遺構が分布し、蒼海（35・81・91）・元総社中学校遺跡などで、多くの住居跡が確認される。元総社北川遺跡・関泉明神北IV・V遺跡など、低地内にはHr-FA洪水層に覆われた小区画水田跡が確認され、この頃までは、牛池川低地平野の広い範囲が開発されたと推測できる。後期になると遺跡は増え、ほぼ全域で住居跡が確認される。一方、該期の古墳は確認されず、蒼海（10・23・28・78）などで埴輪片が出土した程度である。約1km東に福荷山古墳〔43〕が位置し、直径約30m程度の円墳で、6世紀後半頃の築造と推定される。7世紀になると、約2km北に總社古墳群の愛宕山古墳〔口〕・宝塔山古墳〔ハ〕・蛇穴山古墳〔ニ〕や山王庵寺〔ホ〕が建立されて、政治的中枢を形成する。本遺跡周辺では蒼海（7・9・10・35）で、大規模な掘立柱建物跡群と区画溝・飛鳥IIの畿内産暗文瓦が出土しており、遺構の主軸方向は、山王庵寺下層の大規模掘立柱建物跡群に近似する。7世紀の住居跡は広く分布するが、前代に比べると減少し、数軒単位の小規模な群構成が点在する。本遺跡でも該期の住居跡を調査した。

奈良時代、本遺跡の周辺は上野国府の推定域にあたり、国府の位置にはA～Dの4案が推定される。宮鍋神社南面の国府C案推定域やその周囲では、蒼海（99・127・136）・上野国府等範囲内容確認調査（※以下「国府」）28・33・34トレントで掘込地業をもつ建物跡が確認され、蒼海（95・136）では大型掘立柱建物跡が確認されている。一方、この域内では8世紀後半から9世紀末葉まで、住居跡は確認されていない。該期には直進性を指向する大規模な道路網も整備され、蒼海（1）・小見内Ⅲ・Ⅶ遺跡・上野国分僧寺・尼寺中間地域などでは、国分僧寺・尼寺の南面を走る東西道路が、蒼海（2・13・20）・小見Ⅱ・Ⅷ遺跡などでは、染谷川自然堤防上を走る南北道路が確認されている。また、蒼海（14・30・17街区）・国府6トレントで確認された南北道路は、推定「日高道」（D）と山王庵寺西側に推定される「南北古道」（近藤1981）を直線的に繋ぐ一連の道路の一部と予想され、本遺跡A区R-1号道路状遺構も、この道路の一部と判断できる。国府城の特殊性は出土遺物にも反映され、暗文瓦や、須恵器盤・高盤の出土率は他地域に比べて高く、30地点以上に出土例があり、蒼海（13・41）で三彩陶器、蒼海（1・38・40）で腰帶具、蒼海（26・60）では円面鏡なども出土している。

平安時代になると、中小規模の住居跡が無数に確認され、本遺跡でも該期の住居跡を調査した。上野国府域の空間構成は、近年では地点毎の特徴を示す遺物も増加し、検討の俎上にある。例えば、国府城の北西端で国分僧寺・尼寺にも近い、蒼海（26・40・41・116）、小見Ⅱ遺跡などでは、腰帶具・円面鏡の出土率が高く、鉄鉢形土器・三足盤・金の付着した灰釉陶器、富壽神寶などの特徴的な遺物や、「大館」「市」「金」などの墨書き土器が出土している。国府城の北端にあたる染谷川左岸自然堤防上の蒼海（8・13）では綠釉陶器の出土率が特に高い。国府城の北東端にあたる牛池川右岸の蒼海（37・39・53）などでは、馬具・小札・刀装具・鉄鎌など武器・武具の出土が目立つ。なお、国府に関連すると考えられる区画溝は、蒼海（2・9・36・58）・関泉桶遺跡などで確認されている。上野国府がいつまで本来的な意味を有していたかは不明だが、平安時代後半期の国府城を特徴づける遺物も地点的に確認できる。国府B案推定域の国府50トレントでは「阿部私印」銅印が出土した。国

序 C 案推定域の蒼海（99・127）では、多角柱状の長い棒状脚部をもつ白色の酸化塩焼成高杯が数点出土し、元総社小学校寄贈資料の同一器種や蒼海（127）で出土した「ての字口縁」皿とともに、都城の器種組成との類似性が指摘される。蒼海（137）では八稜鏡を含む複数の鏡・铁鐸・铁鈴などが集中的に出土し、遺物の質において周囲と隔絶している。また、蒼海（75 街区）では、小銅仏や銅印の鋳型・取瓶・金屬箔などが鋳造工房から出土し、類似の小銅仏は蒼海（95）から出土している。なお、天慶 2 年（939 年）、国府城は平将門の乱の舞台となるが、関連する考古資料は確認されていない。

国府城は、蒼海城〔i〕により大規模に地形改変されている。国府推定域内の、蒼海（23・29・65・122・124・126）などでは蒼海城中枢部の堀跡群が、蒼海（21）では、二の丸の柱穴群が確認され、帰属時期は 15 世紀を中心とする。関連遺物は、蒼海（23・25）で、12～15 世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・持腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。室町時代、総社長尾氏は、往時に「總社城」と呼ばれたこの城を本拠とした。

慶長 6 年（1601 年）、秋元長朝が総社領主になると蒼海城は廃城し、総社城〔ii〕が築城された。長朝は領内の灌漑体系の整備を行い、天狗岩用水〔a〕を開削した。天狗岩用水の水路網は、五千石堰用水〔b〕や小笠原堰用水〔c〕により補われるが、これらは相馬ヶ原扇状地を水源とする牛王頭川や八幡川の中小河川から取水し、一方で、利根川から取水する天狗岩用水とは、異なる灌漑系統をもつ。その開削時期は天狗岩用水を測る可能性があり、上野国神名帳に残る「小笠原溝口明神」の記載は、小笠原堰用水を指すとの指摘もある（都丸 1943、近藤〔出版年不詳〕）。また、甲稻荷塚大道西遺跡 A 区や、西部第一落合遺跡群（1）〔45〕では、これらの用水路と同一方向に流下する、As-B 降下以前に埋没した大規模な溝跡が確認されている。

Tab. 1 周辺遺跡一覧表 (Fig. 3 范囲)

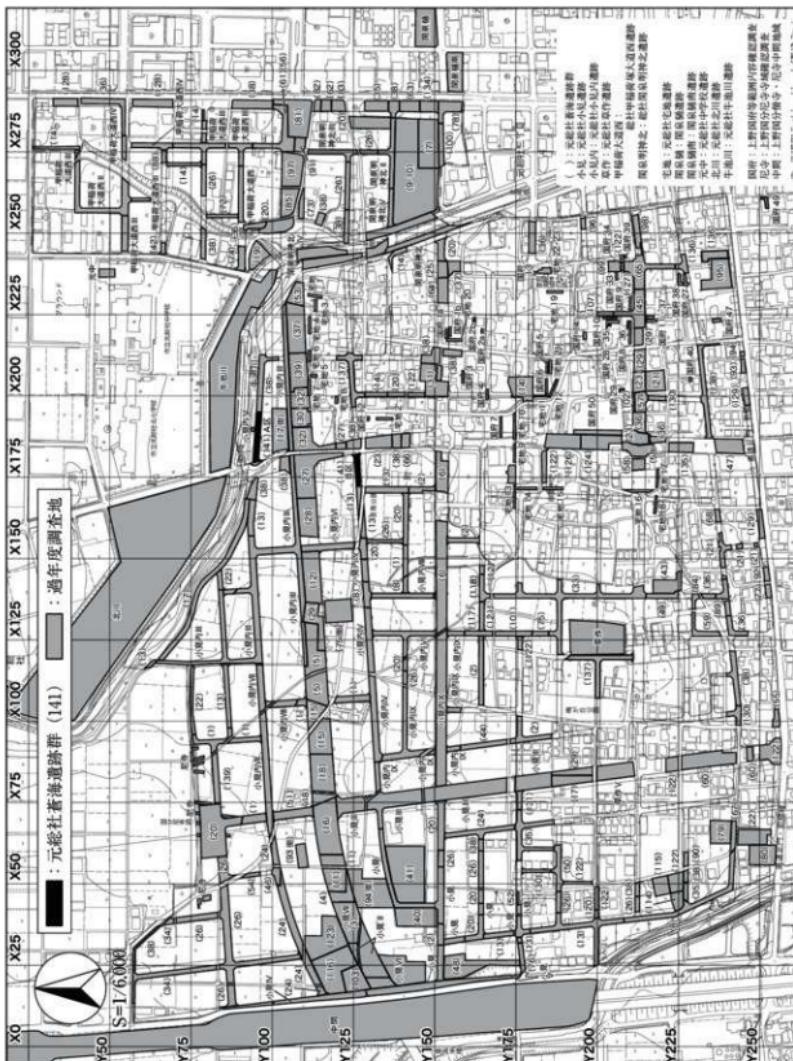
遺跡名	調査年度	時代	主要な遺跡
元総社蒼海北遺跡〔1〕	2006	古墳～平安・奈良時代・飛鳥・奈良時代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代	古墳＝平安・奈良時代・飛鳥・奈良時代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代
元総社蒼海北遺跡〔2〕	2005	平安・奈良・平安・奈良時代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代	平安・奈良・平安・奈良時代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代
元総社蒼海南遺跡〔3〕	2006	古墳・平安・奈良時代・飛鳥・奈良時代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代	古墳・平安・奈良時代・飛鳥・奈良時代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代
元総社小笠原遺跡〔4〕	2006	古墳・平安・奈良時代・飛鳥・奈良時代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代	古墳・平安・奈良時代・飛鳥・奈良時代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代
元総社蒼海南遺跡〔5〕	2006	古墳・平安・奈良・平安・平安・鎌倉・室町・戦国時代	古墳・平安・奈良・平安・平安・鎌倉・室町・戦国時代



1.元総社蒼海北遺跡〔1〕 2.飛鳥・奈良時代遺跡 3.奈良時代遺跡 4.元総社蒼海南遺跡 5.元総社小笠原大支那坂遺跡群 6.元総社小笠原遺跡群 7.元総社小笠原遺跡〔一〕 8.寺内遺跡 9.元総社小学校遺跡 10.井 11.井 12.井 13.上野四分之一井 14.元総社西・中田・牛込・道祖遺跡 15.中田の井原遺跡 16.中田村東古墳群 17.中田松垂遺跡群 18.中田中央古墳群 19.中田の井原遺跡OK 20.原町日吉古墳群 21.原町日吉原遺跡 22.原町日吉原遺跡 23.原町日吉原遺跡 24.原町日吉原遺跡 25.原町台北企久遺跡 26.原町台北企久遺跡 27.馬場古墳群 28.馬場古墳群 29.馬場古墳群 30.馬場古墳群 31.馬場古墳群 32.馬場古墳群 33.馬場古墳群 34.馬場古墳群 35.馬場古墳群 36.馬場古墳群 37.馬場古墳群 38.大和敷遺跡 39.大和敷遺跡 40.大和敷遺跡 41.大和敷遺跡 42.大和敷遺跡 43.大和敷山古墳 44.光見堀古墳遺跡群 45.光見堀古墳遺跡群 46.光見堀古墳遺跡群 47.光見堀古墳遺跡群 48.光見堀古墳遺跡群 49.光見堀古墳遺跡群 50.光見堀古墳遺跡群 51.国府町43-44-45-46-47-48-49-50-51-52-53-54-55-56-57-58-59-59-60-61-62-63-64-65-66-67-68-69-69-70-71-72-73-74-75-76-77-78-79-79-80-81-82-83-84-85-86-87-88-89-89-90-91-92-93-94-95-96-97-98-99-99-100-101-102-103-104-105-106-107-108-109-109-110-111-112-113-114-115-116-117-118-119-119-120-121-122-123-124-125-126-127-128-129-129-130-131-132-133-134-135-136-137-138-139-139-140-141-142-143-144-145-146-147-148-149-150-151-152-153-154-155-156-157-158-159-160-161-162-163-164-165-166-167-168-169-170-171-172-173-174-175-176-177-178-179-180-181-182-183-184-185-186-187-188-189-190-191-192-193-194-195-196-197-198-199-199-200-201-202-203-204-205-206-207-208-209-210-211-212-213-214-215-216-217-218-219-220-221-222-223-224-225-226-227-228-229-230-231-232-233-234-235-236-237-238-239-240-241-242-243-244-245-246-247-248-249-250-251-252-253-254-255-256-257-258-259-260-261-262-263-264-265-266-267-268-269-270-271-272-273-274-275-276-277-278-279-280-281-282-283-284-285-286-287-288-289-290-291-292-293-294-295-296-297-298-299-299-300-301-302-303-304-305-306-307-308-309-310-311-312-313-314-315-316-317-318-319-320-321-322-323-324-325-326-327-328-329-330-331-332-333-334-335-336-337-338-339-339-340-341-342-343-344-345-346-347-348-349-349-350-351-352-353-354-355-356-357-358-359-359-360-361-362-363-364-365-366-367-368-369-369-370-371-372-373-374-375-376-377-378-379-379-380-381-382-383-384-385-386-387-388-389-389-390-391-392-393-394-395-396-397-397-398-399-399-400-401-402-403-404-405-406-407-408-409-409-410-411-412-413-414-415-416-417-418-419-419-420-421-422-423-424-425-426-427-428-429-429-430-431-432-433-434-435-436-437-438-439-439-440-441-442-443-444-445-446-447-448-449-449-450-451-452-453-454-455-456-457-458-459-459-460-461-462-463-464-465-466-467-468-469-469-470-471-472-473-474-475-476-477-478-479-479-480-481-482-483-484-485-486-487-487-488-489-489-490-491-492-493-494-495-495-496-497-497-498-499-499-500-501-502-503-504-505-506-507-508-509-509-510-511-512-513-514-515-516-517-517-518-519-519-520-521-522-523-524-525-526-527-528-529-529-530-531-532-533-534-535-536-537-538-539-539-540-541-542-543-544-545-546-547-547-548-549-549-550-551-552-553-554-555-556-557-557-558-559-559-560-561-562-563-564-565-566-567-567-568-569-569-570-571-572-573-574-575-575-576-577-577-578-579-579-580-581-582-583-584-585-586-587-587-588-589-589-590-591-592-593-594-595-595-596-597-597-598-599-599-600-601-602-603-604-605-606-607-607-608-609-609-610-611-612-613-614-615-615-616-617-617-618-619-619-620-621-622-623-624-625-625-626-627-627-628-629-629-630-631-632-633-634-635-636-637-637-638-639-639-640-641-642-643-644-645-646-647-648-649-649-650-651-652-653-654-655-656-657-657-658-659-659-660-661-662-663-664-665-666-667-667-668-669-669-670-671-672-673-674-675-675-676-677-677-678-679-679-680-681-682-683-684-685-686-687-687-688-689-689-690-691-692-693-694-695-695-696-697-697-698-699-699-700-701-702-703-704-704-705-706-706-707-708-709-709-710-711-712-713-714-714-715-716-716-717-718-719-719-720-721-722-723-724-724-725-726-726-727-728-729-729-730-731-732-733-734-735-736-736-737-738-739-739-740-741-742-743-743-744-745-746-746-747-748-749-749-750-751-752-753-754-755-756-756-757-758-759-759-760-761-762-763-764-764-765-766-767-767-768-769-769-770-771-772-773-774-774-775-776-777-777-778-779-779-780-781-782-783-784-784-785-786-787-787-788-789-789-790-791-792-793-794-794-795-796-796-797-798-798-799-799-800-801-802-803-804-804-805-806-806-807-808-808-809-809-810-811-812-813-813-814-815-815-816-817-817-818-819-819-820-821-822-823-823-824-825-825-826-827-827-828-829-829-830-831-832-833-834-835-836-836-837-838-838-839-839-840-841-842-843-843-844-845-845-846-847-847-848-849-849-850-851-852-853-854-855-856-856-857-858-858-859-859-860-861-862-863-864-864-865-866-866-867-868-868-869-869-870-871-872-873-873-874-875-875-876-877-877-878-879-879-880-881-882-883-884-884-885-886-886-887-888-888-889-889-890-891-892-893-893-894-894-895-895-896-896-897-897-898-898-899-899-900-901-902-903-903-904-905-905-906-907-907-908-908-909-909-910-911-912-913-913-914-915-915-916-917-917-918-918-919-919-920-921-922-923-923-924-925-925-926-927-927-928-928-929-929-930-931-932-933-934-935-936-936-937-938-938-939-939-940-941-942-943-943-944-945-945-946-947-947-948-948-949-949-950-951-952-953-954-955-956-956-957-958-958-959-959-960-961-962-963-964-964-965-966-966-967-968-968-969-969-970-971-972-973-973-974-975-975-976-977-977-978-979-979-980-981-982-983-984-984-985-986-986-987-988-988-989-989-990-991-992-993-993-994-994-995-995-996-996-997-997-998-998-999-999-1000

Fig. 2 周辺遺跡図 (S = 1/25,000)

道路名	調査年度	時代・主な遺跡・遺物
船岡南側北北西道路	2001	古墳・平家・住居跡 ◇PA船・留矢
船岡南側北北東道路	2002	鐵文・古墳・平家・住居跡 ◇門真瓦
船岡南側北北中道路	2002 - 2004	古墳・古墳・平家・住居跡 ◇
船岡南側北北東道路	2004	古墳・古墳・鐵文・平家・住居跡
御前崎北岸	1983	古墳・住居跡・樂良・平家・住居跡
御前崎南岸	1985	古墳・住居跡 ◇幼稚園
元和北川道路	2002 - 2004	鐵文・樂良・平家・住居跡・鐵器・陶器・瓦・石器・土器・漆器・漆文
元和北南川道路	2002 - 2004	古墳・古墳・土器・漆器・漆文



III 調査の方針と経過

1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業の道路予定地であり、調査面積は、559 m²である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000、Y = - 72200.000を基点とする4 mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系）
X 135、Y 165	X = 43340.000 m、Y = - 71660.000 m	X = 43694.9094 m、Y = - 71951.7596 m

発掘調査にあたり、北側調査区をA区、南側調査区をB区とした。表土除去には重機（0.45 m³級バックホウ）を用いた。表土除去はAs-B混入土層の下層を目安とし、いずれの調査区でもAs-C混入黒色土層・総社砂層を遺構確認面とした。遺構確認面はジョレンで精査し、平面的な土質の差により遺構を判断した。遺構の掘り下げは、埋没過程を観察するため土層断面を残しつつ行った。遺構に伴う遺物は、出土位置を記録した上で取り上げた。なおA区R-1の調査では、掘削深度が3 m以上に達したため、調査区壁に法面による養生を施した。

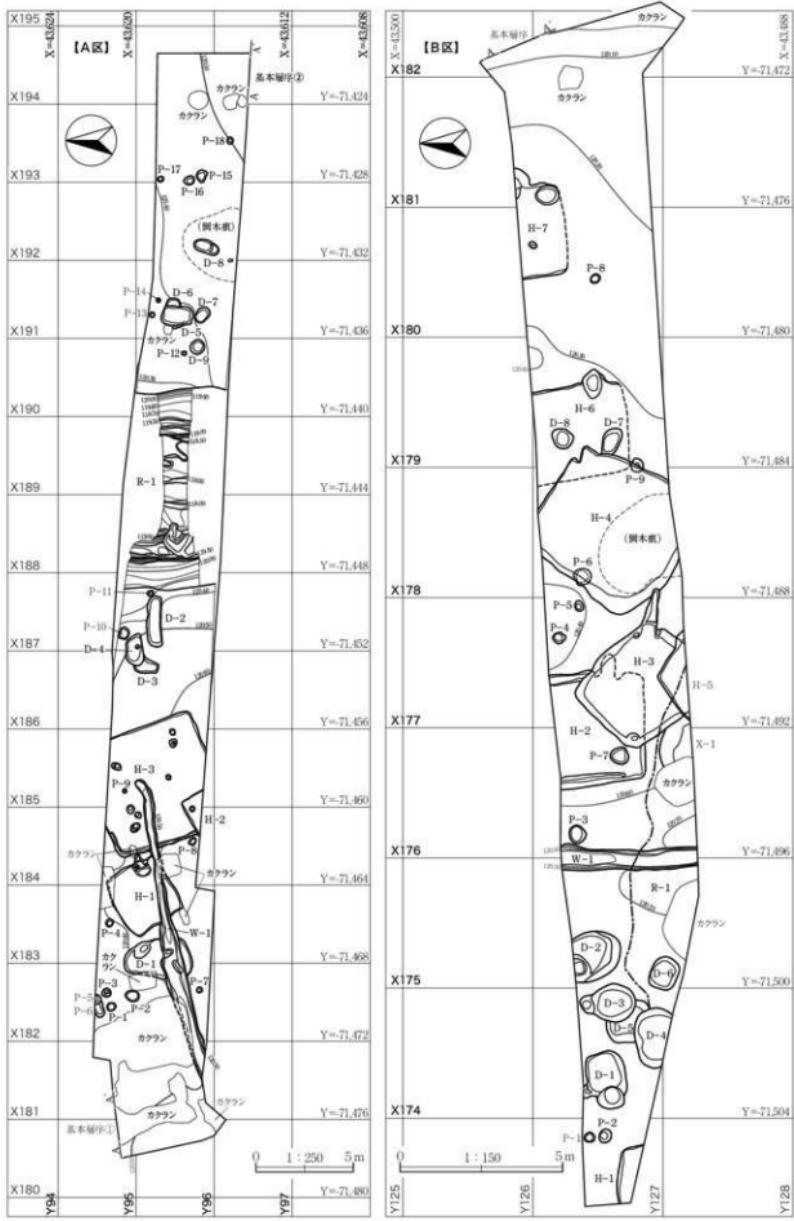
遺構の図面記録は、断面図・平面図・遺物の出土位置について、トータルステーション・電子平板を用い、オルソーフォトを用いた写真測量も多用した。写真記録は、土層断面・完掘状況・遺物出土状況に対し、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/ACROS・ISO100/PROVIA・ISO100）とデジタルカメラ（CanonEOS 6D・EF24-70mmL）を用い、基本的に絞り値f 8～11・広角端で撮影を行った。なお、調査区の全景写真撮影にはドローン（DJI Phantom 4）を用いた。

報告書の作成に際しては、DTPの手法を用いた。遺構図については、原図の作図から報告書掲載の編集図に至るまで一貫してデジタルデータを用い、遺物図については、断面形の計測と外面調整の描画に3Dスキャナ型三次元測定機（KEYENCE VL-300series）を多用し、一部の大型品は手測りでの原図作成後、デジタルトレースを行った。遺物写真の撮影にはデジタルカメラ（CanonEOS 5D/EF200mmL）を用いた。データ化されたこれら一切の調査記録を、レイアウトソフトを用いて組版し、刊行した。

2 調査経過

令和2年6月4日に市教委・区画整理課・技研の三者で事前打ち合わせを行い、発掘調査は6月12日から開始した。先行して除草作業や、周辺の安全対策を行った上で、A区から表土除去を行い、並行して遺構確認や基本層序の確認を進めた。遺構調査は15日から開始。16日にA区の表土除去を終了し、翌17日には重機を回送してB区西半の表土除去を行った。B区は排土処理の都合、東西で排土を置き換えての調査となつたため、調査を優先的に進め、7月2日にB区西半の調査と全景写真撮影を終えた。同日、市教委による終了確認が行われ、7～8日にはB区西半の埋め戻しと、東半の表土除去を行った。梅雨入りとともに調査を始め、例年にない長梅雨の中、荒天を押しての調査となつたが、9日には、今回の主要な調査課題であったA区R-1号道路状遺構も完掘し、10日にはA・B区ともにすべての遺構を完掘し、各調査区の全景写真撮影と市教委による終了確認が行われた。13～14日に掘り方調査などの補足調査と残務を行い、15～20日に各調査区を埋め戻し、梅雨明けとともに現地における全ての調査を終えた。

整理作業は、令和2年7月21日から着手した。22日に遺物の洗浄と注記、29日に分類と報告対象の抽出、31日には遺物写真撮影を終え、実測を始めた。これらの作業に並行して遺構図面の編集作業を進め、8月7日には遺物実測と遺構図の編集を終えた。原稿執筆と組版は11日から行った。13日に遺物挿図と遺物図版、9月2日に遺構挿図の版下が完成した。25日には原稿執筆と組版を終了。市教委による査読の後、10月2日に入稿した。10月30日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

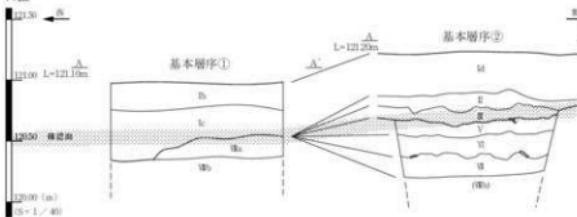


IV 基本層序

A区は区画整理以前は畠地で、西端部には墓地が営まれていた。そのため西端部は改葬時の掘削孔によって大きく擾乱されている。東西に長い調査区の旧地形は、東へ下る緩い傾斜地であり、東半部では表土（I層）直下にAs-B混入土の上部を構成する暗褐色土（II層）が安定的に堆積する。以下にはAs-B混入土の下部を構成する黒色砂質土（III層）と、Hr-FAの混土層（IV層）が部分的に観察できるが、堆積は安定しない。その下層には、いわゆる「C黒」と通称されるAs-C混入黒色土（V層）～淡色クロボク土（VI層）が、層厚は薄いものの安定的に堆積しており、東半部ではこのV～VI層直上を遺構確認面と判断した。西半部は東半よりも地形がやや高いため、II～VI層は流出しない削平されており、I層直下に間層を挟まずに総社砂層の雁層が露出する。そのため西半部ではこの雁層と、その漸移層（VII層）直上を確認面と判断した。なお、A区R-1号道路状遺構壁面の観察では、雁層の下部は、密度は高いがしまりの弱い極細粒砂で構成されており、雁層の約25m下位には前橋泥炭層の堆積が観察できた。

B区は区画整理以前は宅地であったが、I層の堆積が厚いため、遺構確認面はさほど影響を受けっていない。A区東半部同様、I層直下にII層が安定的に堆積し、III層の堆積は部分的だが、IV層は安定的に堆積している。

A区



B区

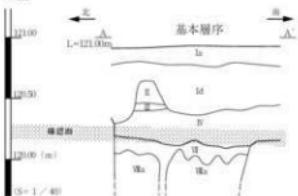


Fig. 5 基本層序

V 遺構と遺物

(1) 穫穴住居跡

A区H-1号住居跡 (Fig. 6・14, PL. 1・5)

位置 X 183・184, Y 94・95 主軸方向 E -33°-N 規模 東西軸 3.61 m・南北軸 3.17 m・深さ 0.18 m 面積 12.66 m² 覆土 As-C を含む暗褐色土を基調とする。床面 カマド手前から西壁際中央付近にかけて帯状に、ややしまりの強い硬化面。重複 A区W-1と重複。新旧関係は本遺構→A区W-1。カマド 東壁のやや南寄りで確認。全長 0.81m・燃焼室内幅 0.51m・煙道内幅 0.32m。焚口部付近は廃施設後に掘り込まれている。燃焼室は両袖の構築材に総社砂層の切石を用いるが、右袖の焚口部は抜き取られており、据え穴のみ残る。火床面や灰層は残存しておらず、燃焼室内も廃施設時に相当搅拌されている可能性が高い。燃焼室内の小穴も、支

IV層の層位は7世紀前半のB区H-3よりも上位で、10世紀後半のB区H-7より下位にあり、この間に形成された古代の耕起層と判断できる。以下には、V～VI層が安定的に堆積しており、この直上を遺構確認面と判断した。旧地形は本来、西へ下る緩い傾斜地であったよう、VI層の堆積は調査区の西側に向かって層厚を増し、湿性でやや粘質化している。以下にはVII～VIII層が安定的に堆積している。

脚据え穴とするには側壁に寄り過ぎており、廃絶時の攪拌に伴うものと推測できる。燃焼室と煙道部の境は有段で、煙道は短く、底面は平坦。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 北壁際から北西隅部が、不整形な溝状に浅く窪む。南壁際西寄りには掘削工具痕が複数箇所確認できる。出土遺物 1の長胴壺はカマド右側の床面直上に破片が散在する。口縁部に最大径があり胴部は張らず、長胴化が顕著。外面は体部下端から口縁部下端まで1単位の縱位ヘラケズリで最終調整される。2の北武藏型壺は竪穴部中央付近の床面直上に破片が散在する。口縁部は短く内屈し、やや深身。3は鏡状の鉄製品だが、細片のため詳細は不明。覆土上層出土で、帰属時期も判断しがたい。時期 床面直上出土の1・2から7世紀前半と推定する。隣接するA区H-2と同時期。

A区H-2号住居跡 (Fig. 7・14, PL. 1・5)

位置 X 184・185、Y 95 主軸方向 E - 29° - N 規模 東西軸 (2.05) m・南北軸 (1.39) m・深さ 0.18 m。竪穴部北東隅部のみ調査。面積 (1.16) m² 覆土 As-C を含む暗褐色土を基調とし、下層は炭化物を含む。床面 ほぼ全面に硬化面。重複 A区H-3と重複。新旧関係はA区H-3→本遺構。カマド 確認できず。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 壁際が不整形でやや深い溝状に窪む。出土遺物 1の模倣壺は、床面直上から正位で出土。小径で浅く、稜部はやや不明瞭。時期 床面直上の1から7世紀前半と推定する。隣接するA区H-1と同時期。

A区H-3号住居跡 (Fig. 6・14, PL. 1・5)

位置 X 184・185、Y 94・95 主軸方向 N - 20° - W 規模 東西軸 6.13 m・南北軸 6.22 m・深さ 0.08 m。周辺は基本層Ⅱ～Ⅵ層が流出しない削平されており、遺構の残存状態は悪い。面積 28.49 m² 覆土 わずかに残存するのみだが、As-C を含む黒褐色土を基調とする。床面 直床。竪穴部の北西部と南東部を除き、広範囲に明瞭な硬化面。重複 A区H-2、A区W-1、A区P-9と重複。新旧関係は本遺構→A区H-2→A区W-1、A区P-9。カマド 確認できず。貯蔵穴 確認できず。柱穴 P 1～4は主柱穴。深さはP 1・46cm、P 2・45cm、P 3・57cm、P 4・(13) cm。いずれも明瞭な柱痕跡は確認できず。P 5・6は覆土や底面標高が主柱穴に類似しており、P 1の差し換えに伴う柱穴の可能性がある。壁周溝 西壁際から北西隅部にかけて、細いが明瞭に確認できる。掘り方 なし。出土遺物 1の高壺脚部は床面直上出土。中実で短脚。時期 重複関係と出土遺物の傾向から6世紀と推定する。

B区H-1号住居跡 (Fig. 7・14, PL. 3・5)

位置 X 173、Y 126 主軸方向 N - 3° - W 規模 東西軸 (1.79) m・南北軸 (0.90) m・深さ 0.46 m。竪穴部北東隅部のみ調査。面積 (0.80) m² 覆土 As-C を含む暗褐色土を基調とし、最下層は総社砂層プロックが目立つ。床面 直床で、やや起伏が多い。硬化面は確認できない。重複 なし。カマド 確認できず。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 なし。出土遺物 覆土下層から出土した1の高台付壺は酸化焰焼成。覆土中から出土した2の壺も酸化焰焼成で、底径は口径の1/2程度を示す。覆土には武藏型壺や羽釜の破片を含むが、細片のため掲載せず。時期 覆土出土も含めた出土遺物の全体的な傾向から、10世紀前半と推定する。

B区H-2号住居跡 (Fig. 7・14, PL. 1・5)

位置 X 176・177、Y 126 主軸方向 E - 5° - N 規模 東西軸 4.05 m・南北軸 (2.83) m・深さ 0.22 m 面積 (8.04) m² 覆土 As-C と炭化物を含む暗褐色土を基調とし、最下層に炭化物の薄層が堆積。床面竪穴部西・南壁際を除き、明瞭な硬化面。重複 B区H-3、B区P-7と重複。新旧関係はB区H-3→本遺構→B区P-7。カマド 東壁の南寄りで確認。竪穴部主軸に対してわずかに南偏する。全長 0.82m・燃焼室内幅 0.36m・煙道内幅 0.24m。燃焼室は、両袖に白色粘土を多く含む褐色の粘質土を用いる。燃焼室中央の支脚手前に火床面が確認できるが、被熱は弱い。カマドの周囲には瓦片が散在し、構築材の一部に瓦を転用していた

可能性がある。支脚は棒状の割石を用いる。燃焼室の奥手に立位で残存し、カマド主軸より若干右に寄る。燃焼室と煙道部の境は不明瞭で、煙道は短く底面は平坦。煙出し付近の両側壁に、やや扁平な転石が一対配置されており、煙道構造に関わる造作と推測できる。火床面・竪穴部中央やや西寄りの床面に、地床炉状の火床面が確認できる。掘り込みなどの構造は伴わず、鋳造洞片等も含まない。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 東西の壁際に、細いが明瞭に確認できる。掘り方 壁際は不整形な円周状に窪み、中央は島状に高い。中央には不整形円形の床下土坑が1基確認できる(SPA・SPBの8層)。出土遺物 1の瓶と3・4の瓦はカマド崩落土内出土。覆土中には武藏型甕の破片がやや目立ち、羽釜や酸化焰焼成の須恵器坏の破片はごく少ない。時期 重複関係と、覆土出土も含めた出土遺物の全体的な傾向から、9世紀後半と推定する。

B区H-3号住居跡 (Fig. 7・8・14, PL. 3・5)

位置 X 176 ~ 178, Y 126・127 主軸方向 N - 45° - E 規模 東西軸 4.11 m・南北軸 3.49 m・深さ 0.34 m 面積 (7.04) m² 覆土 As-C を含む暗褐色土を基調とし、中層以下は炭化物を含む。床面 カマド手前から竪穴部中央に、ややしまりの強い硬化面。重複 B区H-2・4・5、B区X-1と重複。新旧関係はB区H-4・5→B区X-1→本遺構→B区H-2。カマド 東隅角で確認。竪穴部主軸に対して大きく南偏する。いわゆる隅カマドで該期のカマド配置としては特異。全長 1.69m・燃焼室内幅 0.47m・煙道内幅 0.19m。燃焼室は、両袖に白色粘土を多く含む褐色の粘質土を用いる。煙道構造の影響か、焚口部から煙道口付近の左側壁際にかけて帶状にやや強く被熱するため、火床面は分別しがたいが、灰層は焚口部から燃焼室中央にかけて確認できる。支脚は確認できない。燃焼室と煙道部の境は有段で、煙道は長く底面は平坦。左袖直上に1の蓋が逆位で遺棄されており、カマドの廃棄行為に関わるものと推測できる。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 全体的に平坦だが、北隅角のみ不整円形に浅く窪む。出土遺物 1の長胴甕は、カマド手前の床面上から破損遺棄した状態で出土した。口縁部に最大径があり胴部中位がわずかに張る。外面は体部下半と中位から口縁部下端までの2単位の継位ヘラケズリで最終調整される。2の蓋はカマド左袖直上出土。TK-209~TK-217型式の古相に並行する形態的特徴をもつ。3~5は床面上から正位に重なった状態で出土。いずれも明るい橙色で、やや軟質。3の模倣坏の後部は不明瞭。4・5は北武藏型坏で、5はやや大形。外面ヘラケズリの範囲は広く、口縁部は短く直立する。6は覆土出土。胎土は非常にきめ細かく、外面に横位のミガキ、内面は螺旋状暗文で区画した上下に放射状暗文を施す。暗文はごく細密。畿内系暗文坏と判断できる。細片のため詳細不明だが、平城宮分類土師器坏 A の体部片と推定でき、上下2段の放射状暗文の間に螺旋状暗文を施す手法は飛鳥Ⅲ~Ⅳに散見できる。時期 床面上出土遺物の全体的な傾向から、7世紀前半と推定する。

B区H-4号住居跡 (Fig. 8・14, PL. 3~5)

位置 X 177 ~ 179, Y 126・127 主軸方向 N - 39° - E 規模 東西軸 4.60 m・南北軸 4.32 m・深さ 0.20 m 面積 (13.68) m² 覆土 As-C と炭化物を含む暗褐色土を基調とする。床面 カマド手前から竪穴部中央に、ややしまりの強い硬化面。重複 B区H-3・6、B区D-7、B区P-6・9と重複。新旧関係は本遺構→B区H-3→B区D-7→B区H-6、B区P-6・9。カマド 東隅角で確認。竪穴部主軸に対して大きく南偏する。残存状態は悪い。いわゆる隅カマドで該期のカマド配置としては特異。全長 0.50m・燃焼室内幅 0.42m・煙道内幅不明。燃焼室は、両袖に白色粘土を用いる。火床面は確認できず、灰層がわずかに点在する。支脚は確認できない。煙道部はほとんど残存しておらず詳細不明。掘り方は浅い土坑状に窪む。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 北東壁際が浅く窪む。のみ不整円形に浅く窪む。竪穴部中央付近には掘削工具痕が複数箇所確認できる。出土遺物 1の長胴甕は、竪穴部中央の覆土下層に破片が散在する。口縁部に最大径があり胴部は張らない。外面はやや変則的だが体部中位と上半から口縁部下端までの2単位の斜位ヘラケズリで最終調整される。2・3は模倣坏。2は1の破片に混在して覆土下層から出

土した。口縁部下端を沈線状にヨコナデし、やや不明瞭な稜部を作出する。3はカマド内から出土。やや扁平化しているが稜部は明瞭で、底部から口縁部へいたる内面の器形変化も明瞭。 時期 床面直上出土遺物の全体的な傾向から、6世紀後半と推定する。

B区H-5号住居跡 (Fig. 8, PL. 4・5)

位置 X 177, Y 127 主軸方向 N - 48° - E 規模 東西軸 (2.23) m・南北軸 (2.34) m・深さ 0.45 m。竪穴部北隅部のみ調査。 面積 (1.12) m² 覆土 As-C と炭化物を含む黒褐色土を基調とし、下層は焼土を多く含む。 床面 硬化面は確認できない。 重複 B区H-3、B区R-1、B区X-1と重複。新旧関係は本遺構→B区X-1→B区H-3→B区R-1。 カマド 確認できず。 貯蔵穴 確認できず。 柱穴 確認できず。 壁周溝 確認できず。 挖り方 壁際がやや幅広な溝状に窪む。 出土遺物 覆土中から、長胴甕や模倣壺・北武藏型壺の破片が出土したが、細片のため詳細不明。 時期 重複関係から、6世紀後半以前と推定する。

B区H-6号住居跡 (Fig. 8・9・15, PL. 4・5)

位置 X 178・179, Y 126 主軸方向 E - 10° - N 規模 東西軸 3.24 m・南北軸 (3.11) m・深さ 0.05 m。 残存状態悪く、硬化面とカマドの使用面が残存するのみ。 面積 (7.77) m² 覆土 わざかに残存するのみだが、As-Cを含む暗褐色土を基調とする。 床面 直床。カマド手間から竪穴部南半に明瞭な硬化面。 重複 B区H-4、B区D-7・8と重複。新旧関係はB区H-4→B区D-7→本遺構→B区D-7。 カマド 東壁の南寄りで確認。残存状態は悪い。全長 0.99m・燃焼室内幅 0.51m・煙道内幅 0. 不明。燃焼室は、竪穴部東壁を不整円形に掘り込んで構築される。燃焼室中央に火床面が確認できる。火床面直上の奥には1の小皿が逆位で遺棄される。支脚は確認できない。煙道部はほとんど残存しておらず詳細不明。 貯蔵穴 確認できず。 柱穴 確認できず。 壁周溝 確認できず。 挖り方 なし。 出土遺物 1の小皿はカマド内から出土。酸化焰焼成で、底径は口径の1/2程度を示す。2は床面直上から出土した棒状の鉄製品で、鉄製鍤車の軸部の可能性がある。 時期 重複関係とカマド出土の1から、11世紀と推定する。

B区H-7号住居跡 (Fig. 9・15, PL. 4・5)

位置 X 180・181, Y 125・126 主軸方向 E - 8° - N 規模 東西軸 3.41 m・南北軸 (1.54) m・深さ 0.10 m (掘り込み面からの深さ 0.24 m)。竪穴部南半部のみ調査。基本層IV層上面を本来の掘り込み面とするが、VI層上面を確認面としたため、平面的な残存状態は悪く、硬化面と掘り方、カマドの使用面が残存するのみ。 面積 (3.76) m² 覆土 As-C と炭化物を含む暗褐色土を基調とする。 床面 カマド手前から竪穴部中央にかけて、明瞭な硬化面。 重複 なし。 カマド 東壁で確認。全長 1.75m・燃焼室内幅 (0.25) m・煙道内幅 不明。燃焼室の構造は不明だが、崩落土に白色粘土の土塊を多く含むことから、本来は構築材に白色粘土を用いたものと推測できる。燃焼室中央付近でわざかに火床面が確認できるが、被熱は弱い。支脚は確認できない。燃焼室と煙道部の境は不明瞭で、煙道は短く底面は平坦。煙道奥壁は強く傾斜して立ち上がり、煙出し部にいたる。燃焼室の掘り方は、ごく浅い土坑状に窪む。 貯蔵穴 南西隅角で確認。長軸 0.73 m・短軸 0.58 m・深さ 0.10 m。貯蔵穴脇から出土した2の刀子は、刃部が折れ曲がる。 柱穴 確認できず。 壁周溝 確認できず。 挖り方 全体的に起伏は少ないが、南西隅角が不整円形に浅く窪む。中央には不整円形の床下土坑が3基重複する (D 1~3)。D 3→D 2→D 1の順に作り替えられており、D 1は全面に、D 2・3は壁面に白色粘土が貼付されている。しかし火床面や被熱の痕跡はなく、鍛造片等も出土しなかった。掘り方南東部では粘土塊や3・4の楕形鍛冶溝が出土。これら掘り方の状況から、本跡には小規模な小鍛治との関連が想定できる。 出土遺物 1の环は床下土坑のD 1内から出土。酸化焰焼成で、底径は口径の1/2以下を示す。 時期 床下土坑であるD 1出土の1から、10世紀後半と推定する。

(2) 道路状遺構

A区R-1号道路状遺構 (Fig. 9 ~ 11・14、巻頭図版1・2・PL. 2・3・5)

位置 X 187 ~ 190、Y 94 ~ 96 主軸方向 N-3°-W 規模 長さ (5.56) m・上幅 10.39 m・下幅 5.08 m・深さ 3.10 m 形状 総社砂層を掘り抜いて開削された、切通し状（掘削状・オープンカット工法）の路体をもつ。横断面の形状は箱状。通行面である路面部から路肩部は、路体中央に向かって緩く傾斜し、中央は溝状に窪む。切通しの両壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位に両側溝をもち、上半は緩やかに傾斜しながら漏斗状に立ち上がる。調査部分の路面部に路線方向の傾斜はないが、本跡南側に連続する同一遺構である蒼海（17街区）R-1の路面北端部標高と比較すると、勾配 6.56%・11.5% の北側へ下る斜路となる。重複なし。覆土 路面から約 45cm 上位の覆土下層に As-B、その上層には As-Kk の一次的堆積層が観察できる。これら火山灰より上層は、As-B を含む黒褐色～暗褐色土を基調とし、途中に部分的な硬化面（SPA の 6 層）が確認できる。火山灰より下層は、As-C と炭化物を含む黒褐色土を基調とし、路面部までの間に硬化面は確認できない。路面②（新段階）直上には、細粒の砂質土が堆積しており、洪水堆積砂の可能性がある（SPA の 29 層）。As-Kk 直上の状態 As-Kk 降下時の路体断面形状は、自然堆積の進行したレンズ状を呈する。最深部の路体中央付近には成馬の骨・歯が散乱し、廃絶後埋没過程の路体に廃棄ないし流入したものと判断できる（Fig. 9、PL. 2 左下）。なお、馬の骨・歯は、As-B よりも下層の覆土最下層（SPA の 27・28 層）からも出土しており、こちらは道路廃絶直後に廃棄ないし流入したものと判断できる（Fig. 10）。As-B 直下の状態 As-B 降下時の路体断面形状も、自然堆積の進行したレンズ状を呈する。降下時の旧地表面は軟らかいが、一方で馬蹄痕や耕作痕などの細かな起伏は確認できない。硬化面も確認できない（Fig. 9、巻頭図版 2 右下）。砂岩探掘坑 路体西壁に重複する D 1～3 は、路体の覆土最下層（SPA の 28 層、SPB の 6 層）を掘り込み、As-B 直下の堆積土（SPA の 20 層、SPB の 1 層）に覆われる。よって掘削時期は、本遺構が道路の本来の機能を失った直後で、かつ埋没が進行する以前と推定できる（Fig. 10・11）。掘削順序は、最初に路体壁面の総社砂層を方形に大きく抉り（D 3）、次に D 3 の北壁と南壁を拡張して総社砂層を掘削し（D 2）、最後に D 3 の北壁を拡張して総社砂層を掘削する（D 1）。類似の土坑は、古代の大溝である蒼海（9・10）W-1 の北壁などに確認でき、これらには、本遺跡近辺の堅穴住居カマド構築材として普遍的に確認できる、砂岩切石の探掘坑の可能性が指摘されている。

側溝 路体両壁の中位、垂直の壁面から漏斗状の緩い立ち上がりへ形状が変化するあたりに、路体に並行する直線溝が確認でき、覆土に As-B を含まないことから（SPA の 18・22 層）、本跡に付属する側溝と判断した。両側溝の間隔は芯々距離で 6.75 m。幅は東側溝 0.52 m、西側溝 0.57 m。土坑連結工法の構造はもたず、幅狭で、断面形状は弧状、底面は平坦。なお、側溝より外側の緩やかな立ち上がりは路側部にあたると判断できる。路面②（新段階・Fig10） 路面②は、As-B より下層で確認できる 2 面の硬化面のうち上位に形成されたもので、本遺構が本来的に機能した最終段階の路面部と判断したが、一部は路面①（古段階）と硬化面が共有されており、その変化は漸移的である。硬化面は路体底面の中央に 3.02 m の幅で確認できる。中央部は路面①と硬化面・砂礫敷きを共有し、西側は路盤構築土から地山の総社砂層直上が硬化、東側は路面①の路肩に形成された三角堆積層（SPA の 30 層）が硬化する。路面部の側縁から路体両壁の間に硬化面は確認できず、壁面の崩落によると判断できる総社砂層の土塊も散在しており、通行度の低い路肩部と判断できる。路面①（古段階・Fig11） 路面①は、As-B より下層で確認できる 2 面の硬化面のうち下位に形成されたものだが、本跡南側に連続する同一遺構である蒼海（17街区）R-1 や蒼海（30）A-1 の路面形成過程を参照するに、道路開削の最初段階の路面部とは考え難い。路体底面の中央を、幅 1.50 m・深さ 0.16 m ほど掘り込んだ溝の中に、幅 1.19 m の硬化面が確認できる。硬化面は、後述する砂礫敷きの範囲に対応し、砂礫敷きの直上が直接に路面部として使用されたと判断できる。路面②同様、路面部の側縁から路体両壁の間に硬化面は確認できず、路肩部と判断できる。砂礫敷き 路面①（古段階）は、非常に良く締め固められた砂礫敷きを伴う。砂礫敷きの厚さは 5～10 cm ほどで、

中央部がアーチ状にやや高い。直径 0.5 ~ 10cm の亜角礫を主体とし、2 の瓦や土器・須恵器の細片を含み、間詰めに極粗粒砂を含む。礫の岩種は、偏光顕微鏡による岩石剥片の分析や肉眼観察によれば、前橋泥流（浅間火山）に由来するものが多く、新様名火山（ニッカ岳など）を起源とするものや赤城火山（鈴ヶ岳など）を起源とするものを含み、その組成は、調査区の北側を流れる牛池川河床礫の組成とも良く似ている。これらの点から、砂礫敷きの敷設には、近辺の中小河川から採取した亜角礫を中心に、瓦や土器の破片など集落内の廃棄物も再利用したと推測でき、そこにさほど強い計画性を読み取ることはできない。 路盤 路床東半は、総社砂層ブロックを主体とする路盤構築土によって、路肩部の傾斜が調整されているが（SPA の 32 ~ 36 層）、転圧等の造作は確認できない。 波板状凹凸面 確認できず。 路床 路床は総社砂層の最下部から前橋泥炭層に達する。掘削単位や工具痕などの起伏は確認できない。 出土遺物 路面②直上から出土した遺物は 1 の甕のみ。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具の痕跡を明瞭に残すが、細片のため詳細不明。2 は砂礫敷きに転用された瓦の破片。細片のため図示しなかったが、砂礫敷き内からはほかに、三日月高台を含む灰釉陶器 4 片、擬格子タタキを含む須恵器甕 17 片、土器甕・壺 10 片のほか、人の歯 1 片を検出した。3 ~ 5 は As-B より下層の覆土下層出土。3 の段皿は内面中位に段を有し、短い三日月高台が付く。下層からはほかに、羽釜 1 片、酸化焰焼成を含む須恵器壺 12 片が出土した。なお 4 の甕や 5 の蓋のほか、模倣壺 5 片なども下層に含まれるが、これらは主体とする遺物の帰属時期よりも古く、周囲の集落跡から混入したものだろう。また、やはり細片のため図示しなかったが、As-B 直下の旧地表面からは酸化焰焼成の須恵器壺 2 片などが出土した。 時期 本跡の調査結果から開削時期は推定しがたい。砂礫敷きに転用された数少ない土器片のうちで、時期的な下限となるのは灰釉陶器の三日月高台細片で、その施工時期は 9 世紀後半頃と推定でき、2 の瓦片が含まれる点とも整合的である。本来的な機能が停止した時期について、本跡の調査範囲に限っては、廃絶から As-B 降下までの間に、ある程度の自然堆積層が形成されており、時間差を見積もる必要がある。砂礫敷きから As-B 直下の層位の中で時期的な下限となる遺物群は、3 の段皿や羽釜、酸化焰焼成の須恵器壺であり、一方で酸化焰焼成の須恵器小皿は組成に含まれない。以上の点を勘案するに、切通しは 10 世紀代には廃絶した可能性を指摘できる。ただし、本跡南側に連続する同一遺構である蒼海（17 街区）R-1 では、As-B の直下まで路面の硬化層が連続し、本跡の状況と整合しない。本跡の東西には後続する時期の切通しも確認できないことから、おそらく、廃絶後放棄されて、溝状に肅地化した切通しは迂回され、路線全体としては As-B の降下前後、すなわち平安時代末頃までは踏襲されたものと推測できる。 備考 道路状遺構の構造分解（各部位名称）については基本的に小鹿野 2003 に依拠し、近江 1994・2006、山村 1993 を参照した。砂礫敷きの岩種については、中島啓治氏の主催する岩石学研究グループに鑑定をご協力いただいた。

B 区 R-1 号道路状遺構 (Fig. 8)

位置 X 174・177、Y 126・127 主軸方向 E - 9° - S 規模 長さ (11.1) m・幅 (22.7) m 形状等 南東 - 北西に走向する。掘り込みは確認できない。 重複 H - 3・5、W - 1、D - 6、X - 1 と重複。新旧関係は H - 5 → X - 1 → H - 3 → W - 1、D - 6 → 本遺構。 覆土 路面部の構築土は As-B を含むにぶい褐色土を基調とする。 硬化面 遺構確認面直上が不整形な帯状に硬化する。硬化は割著。側溝や波板状凹凸面などの構造は伴わない。 出土遺物 なし。 時期 重複関係と覆土に As-B を含むことから、12 世紀以降と推定する。

(3) 溝跡

A 区 W-1 号溝跡 (Fig.11)

位置 X 181 ~ 185、Y 95・96 主軸方向 E - 12° - N 規模 長さ (9.40) m・上幅 0.70 m・下幅 0.48 m・深さ 0.23 m 形状等 東西に走向する。断面やや不整形な U 字状。底面は起伏が多い。 重複 B 区 H - 1・3、B 区 D - 1 と重複。新旧関係は B 区 H - 3 → B 区 H - 1 → B 区 D - 1 → 本遺構。 覆土 As-B を含む暗褐色土を基調とする。 出土遺物 覆土中から志野焼の碗や土器・須恵器の甕・壺、瓦などが出土したが、細片のた

め詳細不明。 時期 重複関係から、近世以降と推定する。

B 区 W-1 号溝跡 (Fig.12)

位置 X 176, Y 126・127 主軸方向 N - 1° - W 規模 長さ (4.28) m・上幅 0.64 m・下幅 0.34 m・深さ 0.39 m 形状等 南北に走向する。断面邊台形状。底面はほぼ平坦。重複 B 区 R-1 と重複。新旧関係は本造構 → R-1。覆土 As-C を含む暗褐色土を基調とする。出土遺物 覆土中から須恵器の壺・壺・土師器の壺・甕や瓦が少量出土した。いずれも細片のため詳細不明だが、酸化焰焼成の須恵器壺片を含む。時期 重複関係と出土遺物の傾向から、9～10世紀と推定する。

(4) 土坑、ピット (Fig.12・13・15)

B 区 D-1～4・6・7 は、出土遺物の傾向から、平安時代の土坑と判断した。B 区 P-6・9 の底面には、白色粘土が付着する。出土遺物の傾向と重複関係から、平安時代のピットと判断した。底面に白色粘土が付着する類似の造構に、B 区 H-7 の床下土坑 (B 区 H-7 D1～3) があり、これらは一連の造構群の可能性がある。

なお、各造構の計測値については、Tab. 2 に示す。

(5) 性格不明造構

B 区 X-1 号性格不明造構 (Fig. 8)

位置 X 176～177, Y 127 主軸方向 不明 規模 長さ (1.21) m・幅 (1.01) m・深さ 0.45 m 形状等 平面形は不明。断面形は緩い弧状で、底面は平坦。重複 B 区 H-3・5、B 区 R-1 と重複。新旧関係は B 区 H-5→本造構→B 区 H-3→B 区 R-1。覆土 As-C を含む黒褐色土を基調とする。出土遺物 覆土中から須恵器甕や北武藏型壺が出土したが、細片のため図示しなかった。時期 出土遺物の傾向と重複関係から、6世紀後半以前と推定する。備考 本跡は堅穴住居跡の隅角部の可能性もあるが、床面の硬化は確認できず、壁面の形状も緩やかで、断定しがたい。調査範囲も狭小で詳細不明のため、性格不明とする。

(6) 造構外出土遺物

造構外から際立った遺物の出土はない。B 区 H-4 に重複する倒木痕の捻転土層中から、諸磯 b 式の深鉢が 12 片出土したが、いずれも細片のため図示しなかった。

Tab. 2 土坑、ピット計測表

造構名	位 置	長軸	短軸	深さ	平面形状	主な遺物	時期	備 考
A 区 D-1	X 176 Y 126	330	1.00	0.14	平開円形	須恵器小壺	近世以降	As-C を含む。
D-2	X 176 Y 127	256	0.73	0.23	直方形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
A 区 D-3	X 176 Y 127	128	0.96	0.37	平開円形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
D-4	X 176 Y 127	128	0.64	0.14	平開円形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
A 区 D-5	X 176 Y 127	122	1.00	0.24	平開円形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
D-6	X 176 Y 127	118	0.75	0.16	直角方形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
D-7	X 176 Y 127	118	0.75	0.16	直角方形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
A 区 P-6	X 176 Y 127	102	0.62	0.27	円形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
P-7	X 176 Y 127	102	0.62	0.27	円形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
A 区 H-3	X 176 Y 127	133	0.60	0.40	平開円形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
H-4	X 176 Y 127	102	0.64	0.22	円形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
A 区 H-5	X 176 Y 127	127	1.23	0.30	深丸方型	須恵器(縫合) 須恵器(縫合)	9～11	As-C を含む。 As-C を含む。
H-6	X 176 Y 127	110	0.64	0.22	円形	須恵器	近世以降	As-C を含む。
A 区 H-7	X 176 Y 127	110	0.64	0.22	円形	須恵器(縫合) 須恵器(縫合)	10～12	As-C を含む。 As-C を含む。
H-8	X 176 Y 127	122	1.17	0.22	円形	須恵器(縫合) 須恵器(縫合)	9～11	As-C を含む。 As-C を含む。
A 区 H-9	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-10	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-11	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-12	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-13	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-14	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-15	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-16	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-17	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-18	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-19	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-20	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-21	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-22	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-23	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-24	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-25	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-26	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-27	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-28	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-29	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-30	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-31	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-32	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-33	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-34	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-35	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-36	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-37	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-38	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-39	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-40	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-41	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-42	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-43	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-44	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-45	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-46	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-47	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-48	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-49	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-50	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-51	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-52	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-53	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-54	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-55	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-56	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-57	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-58	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-59	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-60	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-61	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-62	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-63	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-64	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-65	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-66	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-67	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-68	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-69	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-70	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-71	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-72	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-73	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-74	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-75	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-76	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-77	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-78	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-79	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-80	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-81	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-82	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-83	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-84	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-85	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-86	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-87	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-88	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-89	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-90	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-91	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-92	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-93	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-94	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-95	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-96	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-97	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-98	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-99	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-100	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-101	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-102	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-103	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-104	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-105	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-106	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-107	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-108	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
A 区 H-109	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。
H-110	X 176 Y 127	122	0.60	0.30	円形	須恵器	9～10	As-C を含む。

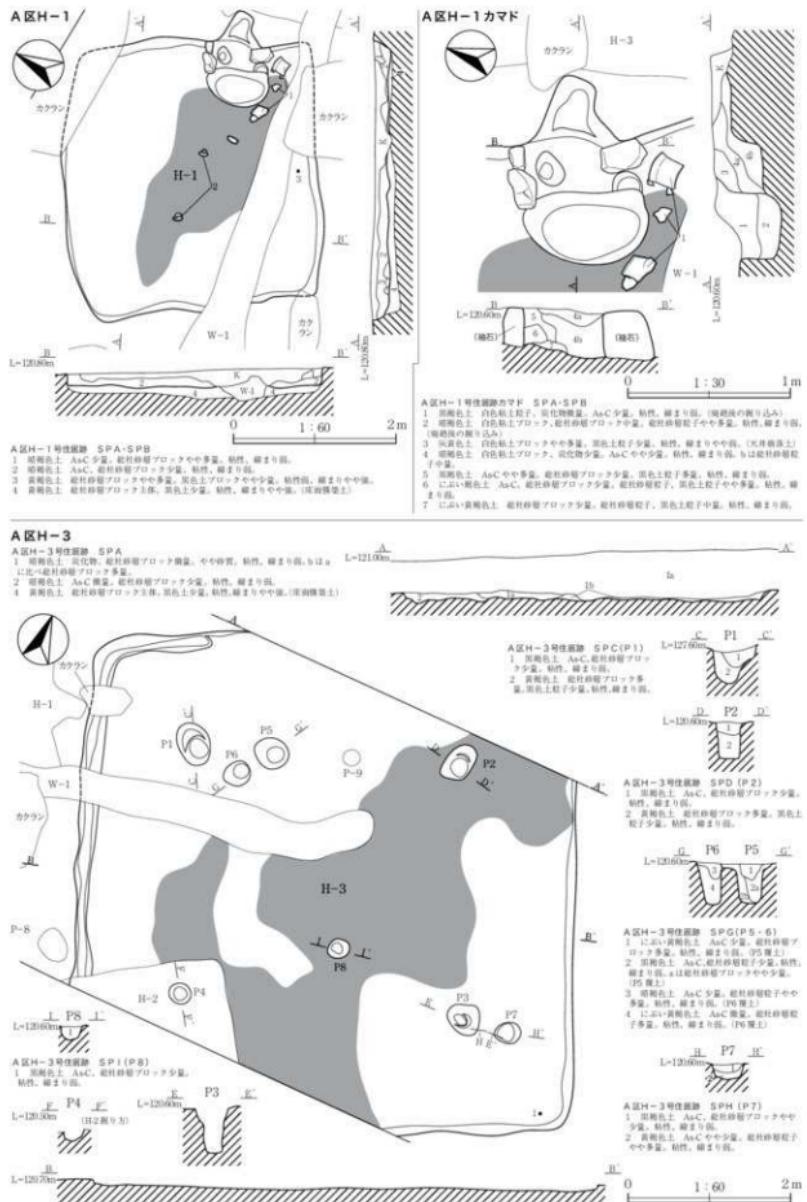


Fig. 6 A区 H-1・3号住跡

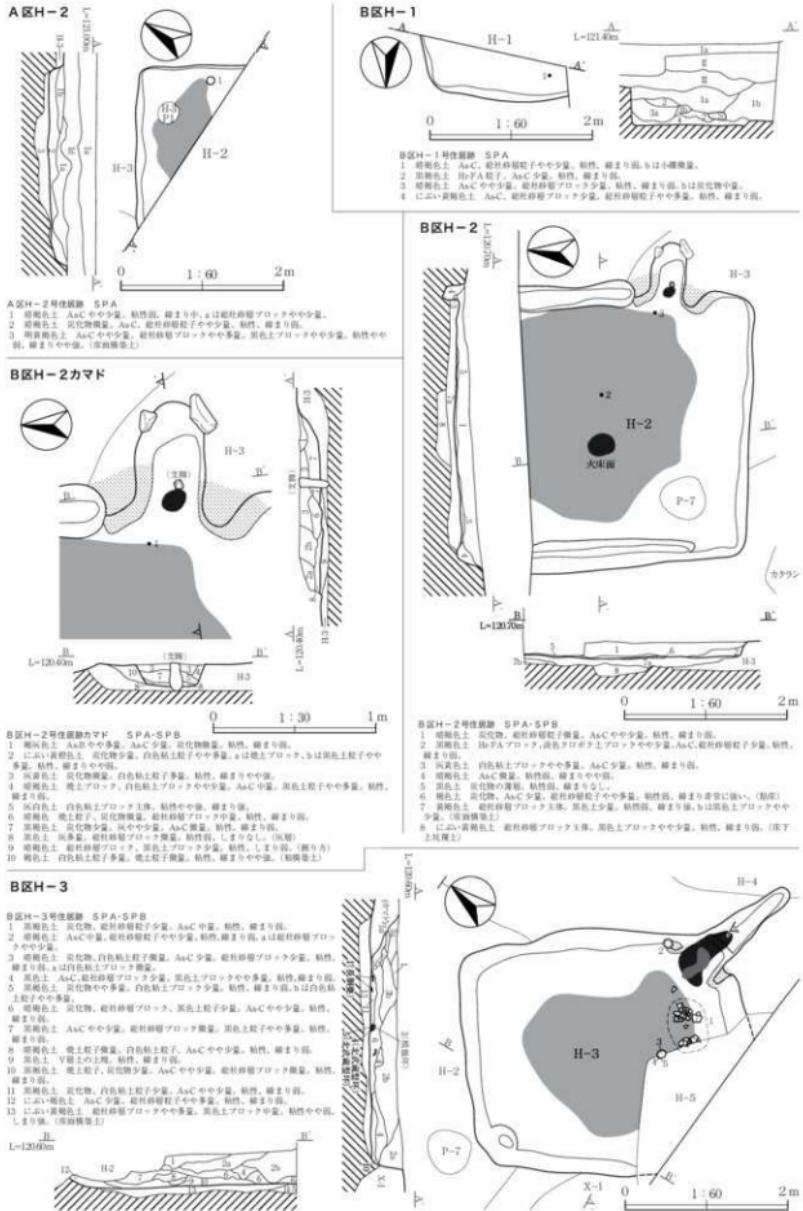
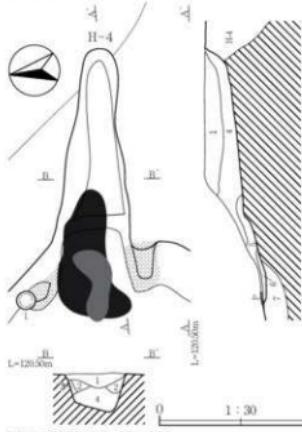
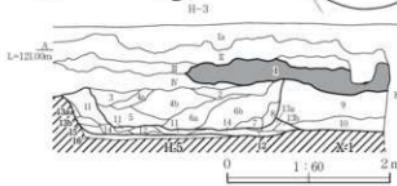
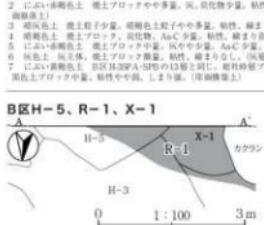


Fig. 7 A区 H-2, B区 H-1～3号住居跡

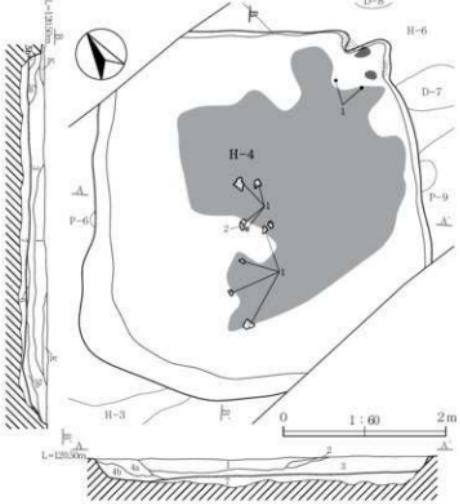
B区H-3カマド



B区H-4号性質断面



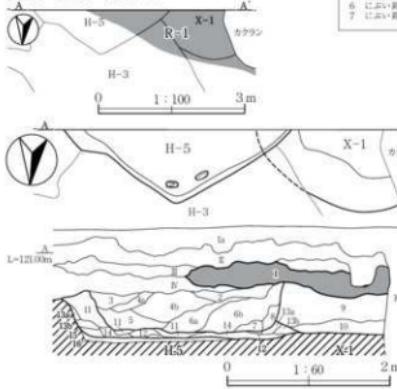
B区H-4



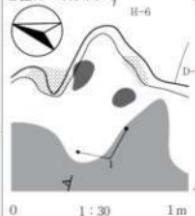
B区H-4号性質断面 SPA-SPB

1. 黄褐色土、炭化物少、白色粘土ブロック、As-C少量、粘性、縮まり岩。
2. 黄褐色土、炭化物少、白色粘土ブロック、As-C中量、粘性、縮まり岩。
3. 黄褐色土、炭化物少、白色粘土ブロック、As-C中量、粘性、縮まり岩。
4. 黄褐色土、炭化物多量、白色粘土ブロック、As-C中量、粘性、縮まり岩。
5. 黄褐色土、炭化物少、白色粘土ブロック、As-C中量、粘性、縮まり岩。
6. 黄褐色土、炭化物少、白色粘土ブロック、As-C中量、粘性、縮まり岩。
7. 黄褐色土、炭化物少、白色粘土ブロック、As-C中量、粘性、縮まり岩。

B区H-5、R-1、X-1、X-1号性質不明断面



B区H-4カマド



B区H-6号性質断面

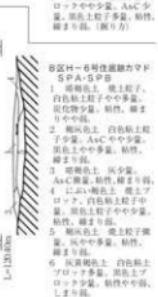
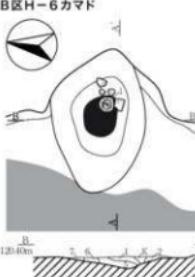
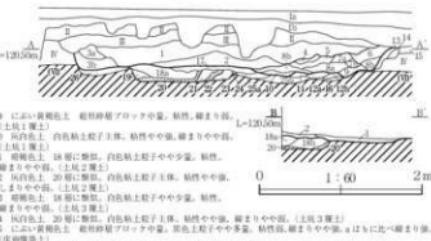
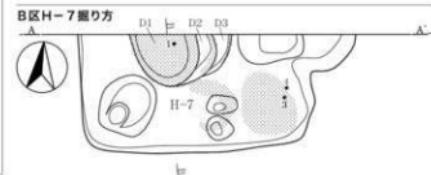
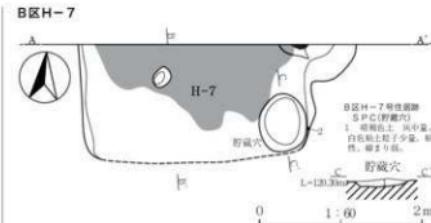
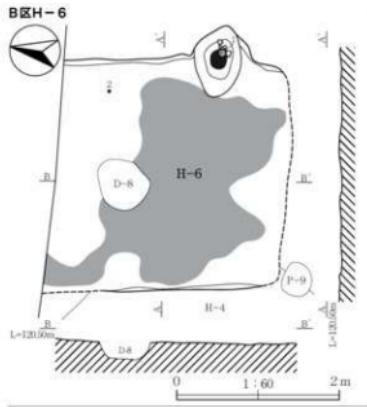


Fig.8 B区H-3～6号住居跡、R-1号道路状構造、X-1号性格不明構造



A区R-1 (As-B直下検出状況)

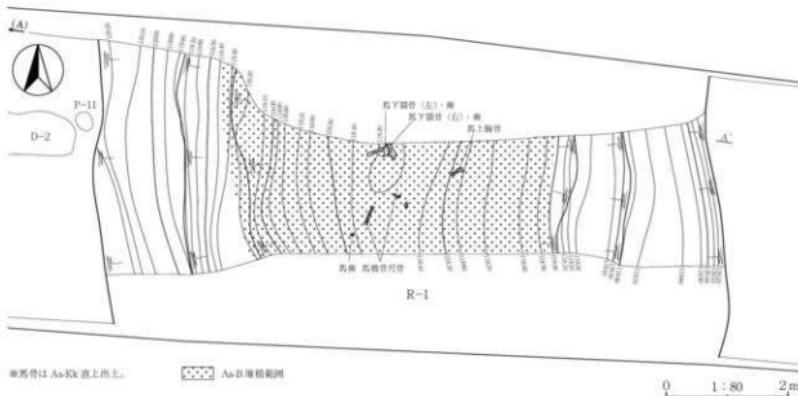


Fig. 9 B区H-6・7号居住跡、A区R-1号道路状造構

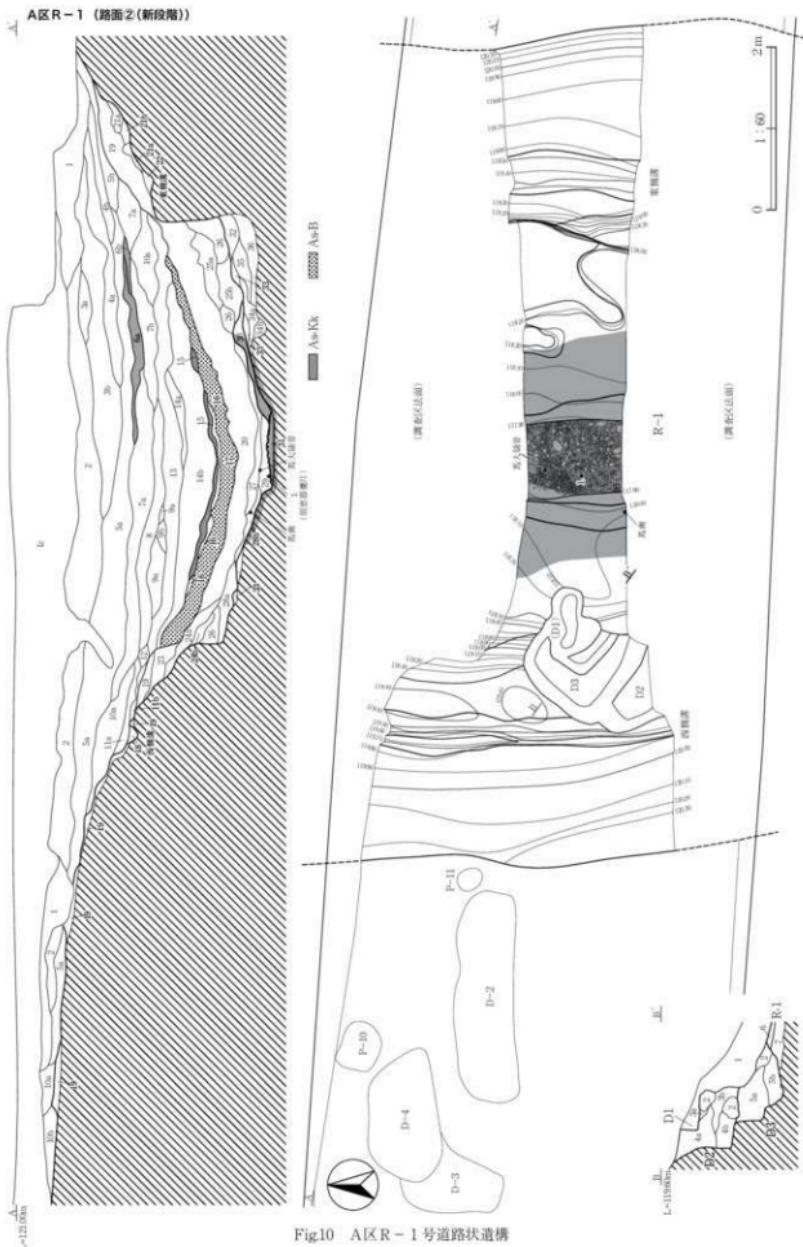
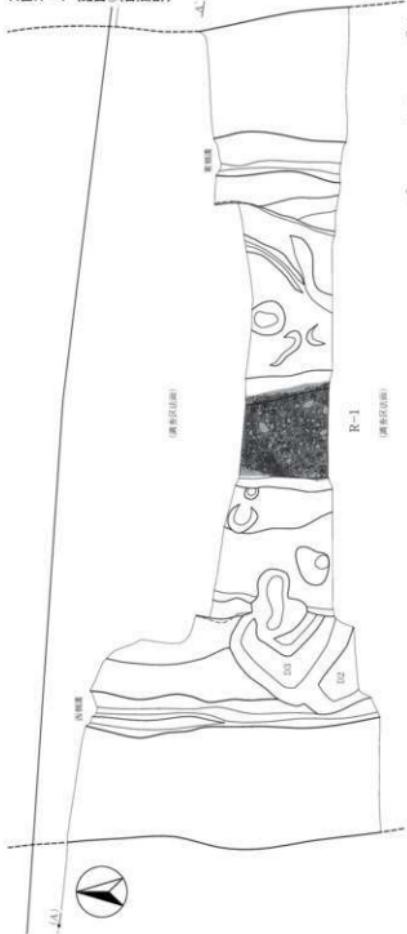


Fig.10 A区R-1号道路状遺構

A区R-1 (路面①(古段點))



アリーナ SPA の特徴と料金 [B1] ~[B3]

1. 開業後、アリーナ SPA の評判が良くて、人気があり、客室は予約が取れない状態。アリーナ SPA の評判が良い理由。
アリーナ SPA の評判が良い理由は、アリーナ SPA の設備が充実しているからです。アリーナ SPA の設備は、アリーナ SPA の特徴であるアリーナ SPA の設備が充実しているからです。
2. 開業後、アリーナ SPA の評判が良くて、人気があり、客室は予約が取れない状態。アリーナ SPA の評判が良い理由。
アリーナ SPA の評判が良い理由は、アリーナ SPA の設備が充実しているからです。アリーナ SPA の設備は、アリーナ SPA の特徴であるアリーナ SPA の設備が充実しているからです。
3. 開業後、アリーナ SPA の評判が良くて、人気があり、客室は予約が取れない状態。アリーナ SPA の評判が良い理由。
アリーナ SPA の評判が良い理由は、アリーナ SPA の設備が充実しているからです。アリーナ SPA の設備は、アリーナ SPA の特徴であるアリーナ SPA の設備が充実しているからです。
4. 開業後、アリーナ SPA の評判が良くて、人気があり、客室は予約が取れない状態。アリーナ SPA の評判が良い理由。
アリーナ SPA の評判が良い理由は、アリーナ SPA の設備が充実しているからです。アリーナ SPA の設備は、アリーナ SPA の特徴であるアリーナ SPA の設備が充実しているからです。
5. 開業後、アリーナ SPA の評判が良くて、人気があり、客室は予約が取れない状態。アリーナ SPA の評判が良い理由。
アリーナ SPA の評判が良い理由は、アリーナ SPA の設備が充実しているからです。アリーナ SPA の設備は、アリーナ SPA の特徴であるアリーナ SPA の設備が充実しているからです。
6. 開業後、アリーナ SPA の評判が良くて、人気があり、客室は予約が取れない状態。アリーナ SPA の評判が良い理由。
アリーナ SPA の評判が良い理由は、アリーナ SPA の設備が充実しているからです。アリーナ SPA の設備は、アリーナ SPA の特徴であるアリーナ SPA の設備が充実しているからです。
7. 開業後、アリーナ SPA の評判が良くて、人気があり、客室は予約が取れない状態。アリーナ SPA の評判が良い理由。
アリーナ SPA の評判が良い理由は、アリーナ SPA の設備が充実しているからです。アリーナ SPA の設備は、アリーナ SPA の特徴であるアリーナ SPA の設備が充実しているからです。

A**EW**-1

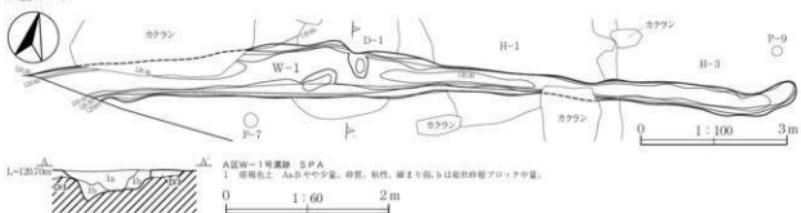


Fig.11 A区R-1号道路状遺構、W-1号溝跡

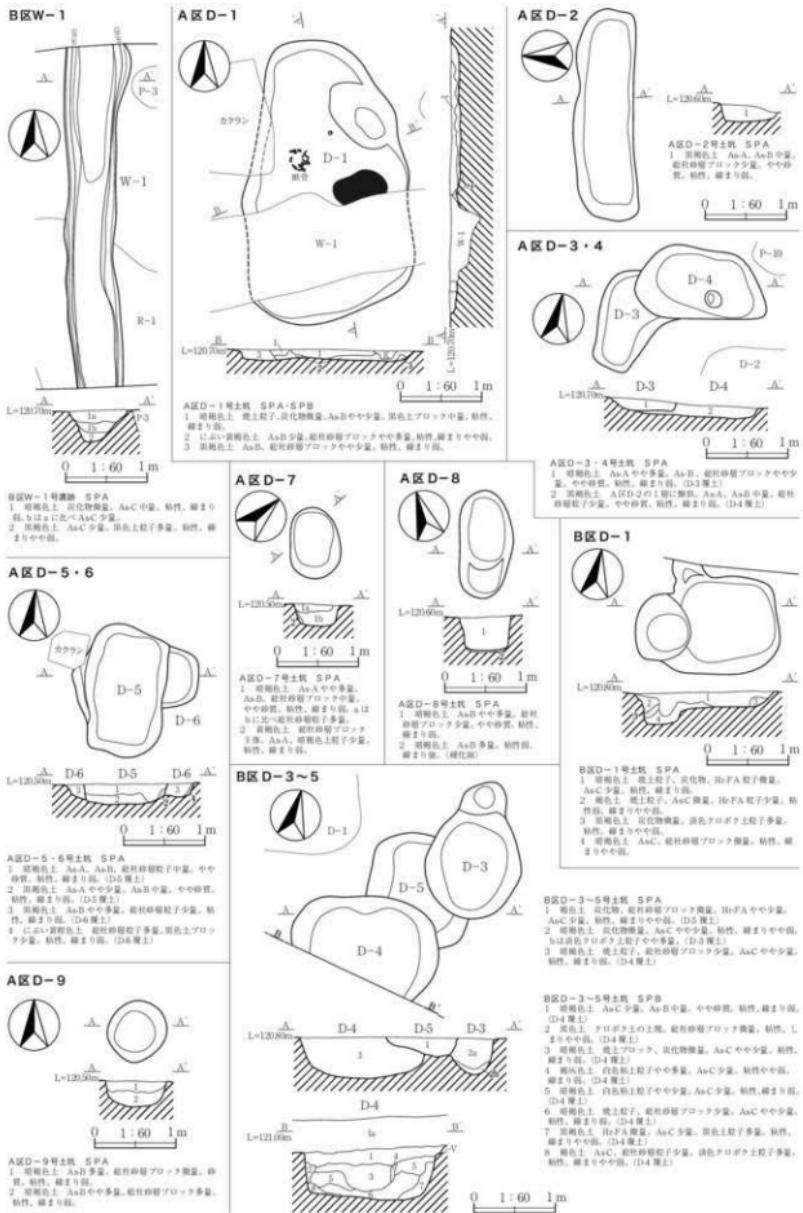


Fig12 A区 D-1～9号土坑、B区 W-1号溝跡、B区 D-1～3～5号土坑

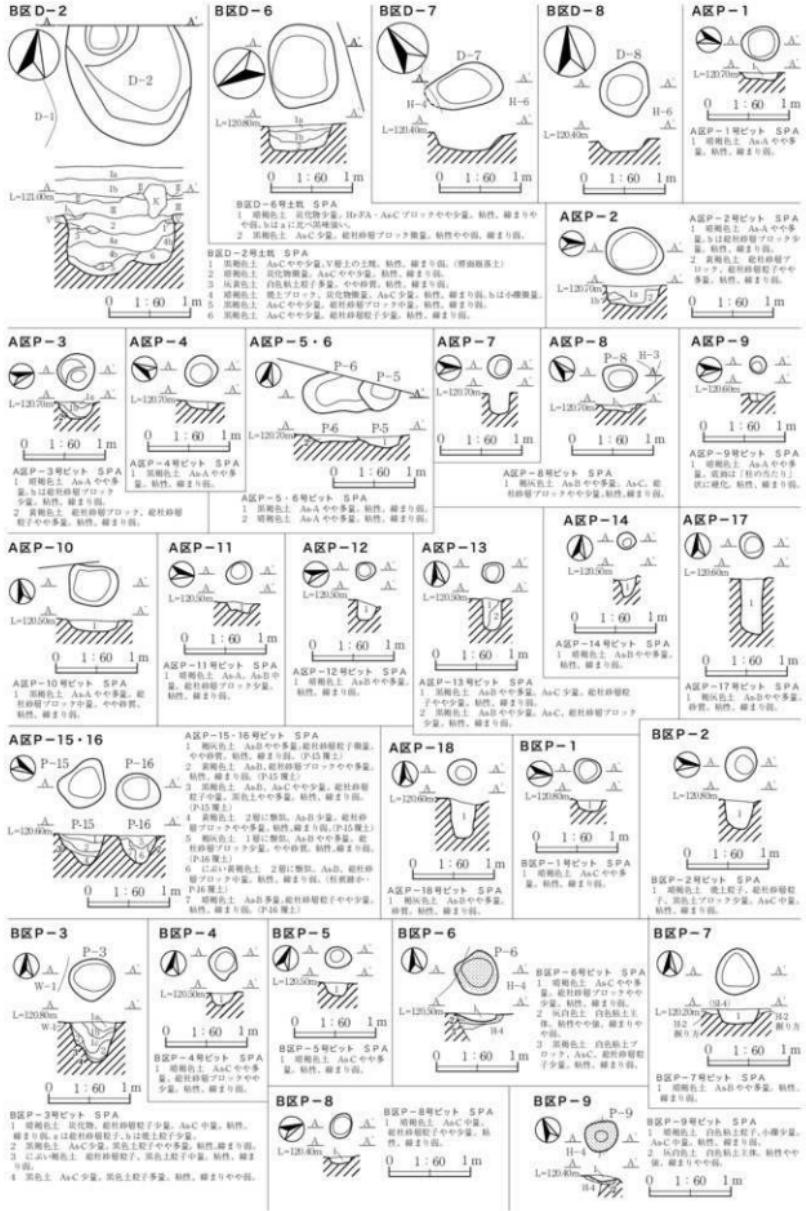


Fig.13 A区P-1~18号ビット、B区D-2・6~8号土坑、B区P-1~9号ビット

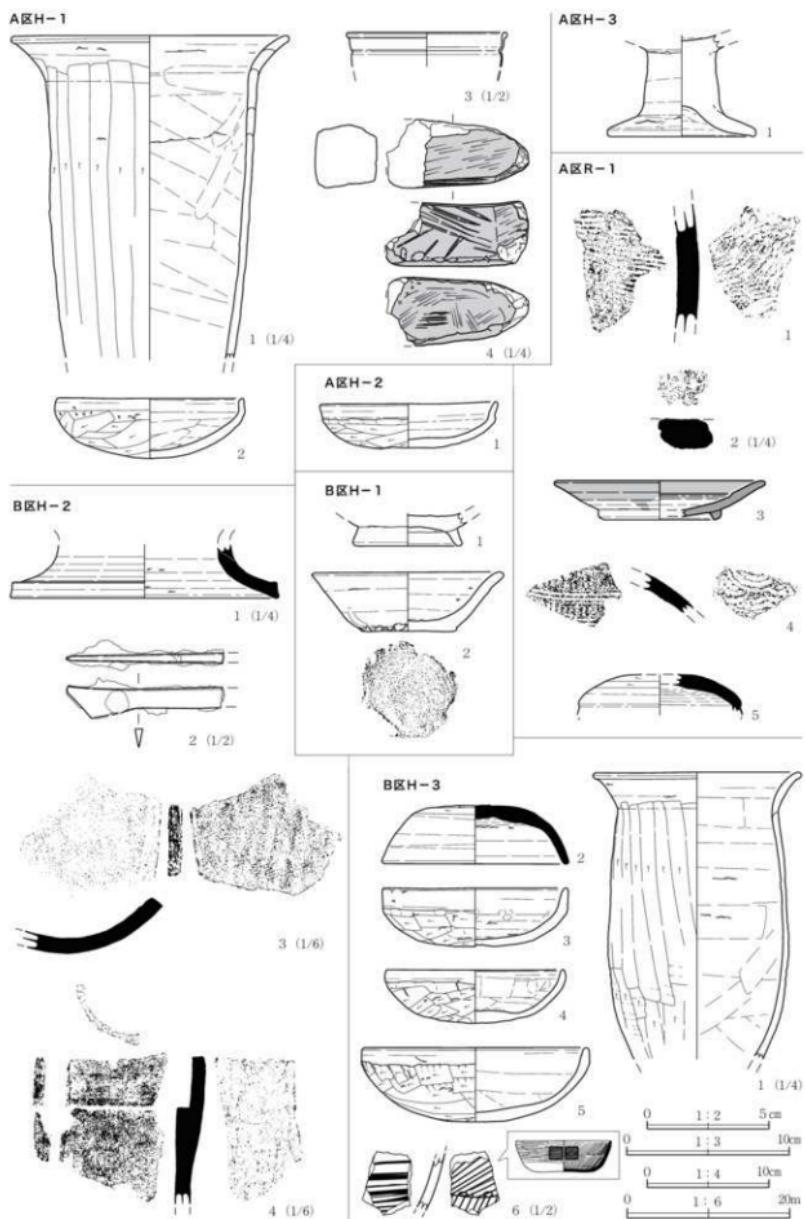


Fig.14 A区 H-1~3, A区 R-1, B区 H-1~3出土遺物

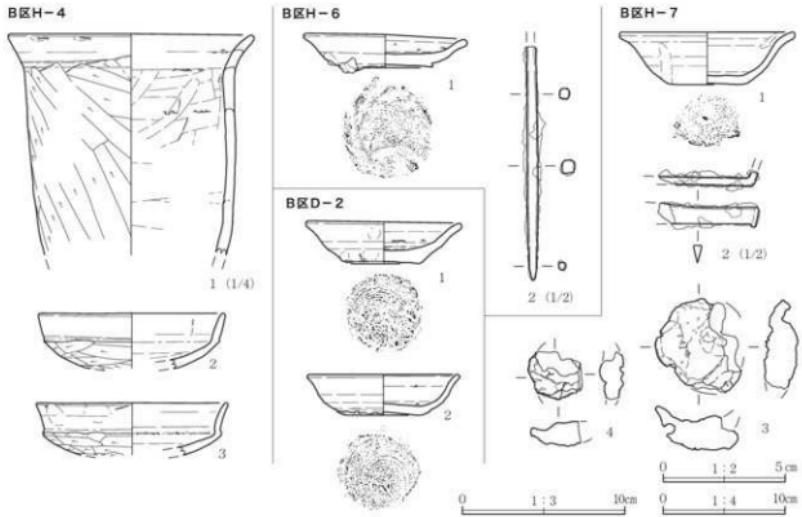


Fig.15 B区H-4・6・7、B区D-2出土遺物

Tab. 3 出土遺物観察表

A区H-1

No.	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考	
1	No.1-3	土器	縦縫目	22.7	—	(26.7)	赤陶、白陶、青白陶	直脚	外側: 明褐色 内側: 明褐色	外側: 口縁部ヨコナギ、底部ヘラキズリ。	1.3 内筒 底面直。	
2	No.6-7	土器	縦縫目	11.4	—	3.8	白陶母陶粒、やや不均一	直脚	外側: 明褐色 内側: 明褐色	外側: 口縁部ヨコナギ、底部ヘラキズリ。 内側: 口縁部ヨコナギ、底部ナグ。	宝弓、北武威整形、 底面直。	
No.	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考	
3	No.8	衣鉢	直筒	(6.4)	—	1.4	良	直脚	—	—	口縁部下脚付、口縁部に付属。	
No.	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考	
4	廻土	竹籠	直筒	(11.6)	5.6	5.4	黒灰岩	—	灰褐色	4032g	—	1.2 内筒、 底上。

A区H-2

No.	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.1	土器	縦縫目	10.6	—	3.0	赤陶、白陶、青白陶	直脚	外側: 良好 内側: 明褐色	外側: 口縁部ヨコナギ、底部ヘラキズリ。 内側: ヨコナギ。	宝弓。底板焼痕複数。 底面直。

A区H-3

No.	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.1	土器	縦縫目	—	(8.8)	(6.0)	赤陶、白陶、青白陶	直脚	外側: 明褐色 内側: 明褐色	外側: ヨコナギ 内側: ヨコナギ。	底板焼痕。 底面直。

A区R-1

No.	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.1	土器	縦縫目	—	—	8.1	良石、チャート	堅脚	外側: 青白陶 内側: 青白陶	外側: 手行ナグ。 内側: 同心円内凹。	削成直。 直台上。(鉄刃)直上。
No.	出土位置	種別	形態	底径	厚さ	地土	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
2	廻石	石片	円形	(4.3)	(4.5)	2.2	良石、白色岩	堅脚	外側: 青白陶 内側: 青白陶	外側: 市松模、半球底。 内側: 小凹、圓底。	削直。 削標付。(小凹用)。
No.	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
3	下箱	火薬箱	直筒	(13.0)	(7.2)	2.3	灰陶無なし	堅脚	外側: 灰白色 内側: 灰白色	外側: 同ナグ。	1.1 灰丸。
4	下箱	火薬箱	直筒	—	—	(2.3)	白色岩、赤色岩	堅脚	外側: 均一 内側: 均一	外側: 手行ナグ。	火薬丸。灰丸。空。直上。(Aa-Bd)。
5	下箱	火薬箱	直筒	—	—	(2.3)	石灰、白色岩	堅脚	外側: 均一 内側: 均一	外側: 光滑圓弧化ナグ。→口縁部~舟足部下端回転ナグ。	削直。 削上直解。(Ab-Bd)。

B区H-1

No.	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.1	土器	縦縫目	—	6.6	(2.6)	赤色岩質	直脚	外側: 良好 内側: 明褐色	外側: 削成後切り直し。直脚付。 内側: ナグ。	削成直。 燒化直焼。
2	廻土	土器	縦縫目	11.8	5.9	3.8	石灰、黃石	直脚	外側: 良好 内側: 明褐色	外側: ヨコナギ。底部回転ナグ。	4.5 灰丸。燒化直焼。 直上。

B区H - 2

No	出土位置	種別、特徴	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
1	カマド 灰	灰	—	(26.6)	(44)	砾石	外周に ない表面 内側に ない表面	外周 内側	四面ナダ。 内側四面ナダ。	良好焼成。 カマド内。	
No	出土位置	種別、特徴	底径	高さ	付属	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
2	Na5	跳石法 灰	(6.4)	6.8	0.4	灰	—	—	10kg	—	良好焼成。
No	出土位置	種別、特徴	底径	高さ	付属	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
3	Na3	灰	(16.1)	(27.0)	1.7	黄石、白色 白	堅壁	外周 内側	四面ナダ。 内側四面ナダ。	四面ヘラナダ。毎日焼。	焼成。 カマド内。
4	カマド 灰	灰	(17.7)	(40.7)	3.3	黄石、白色 白	堅壁	外周 内側	四面ナダ。 内側四面ナダ。	ハラナダ。 ユビナダ。後退面・側面へハラナダ。毎日焼。	良好焼成。 有段式。 カマド内。

B区H - 3

No	出土位置	種別、特徴	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
1	Na3 - 4 土器部	灰	37.2	—	(27.0)	黄石 白	良好	外周 内側	四面ナダ。 内側四面ナダ。	四面ナダ。 内側四面ナダ。	良好焼成。 カマド内。
No	出土位置	種別、特徴	底径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考		
2	Ne1	灰	11.6	—	(5.6)	黄石、白色 白	堅壁	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
3	Na5	土器部 灰	(11.4)	—	3.5	黄石、白色 白	堅壁	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
4	Na6 土器部 灰	灰	10.6	—	3.4	黄石、白色 白	堅壁	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
5	Na6 土器部 灰	灰	(14.0)	—	4.5	黄石、白色 白	堅壁	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
6	寶土	土器部 灰	—	—	2.4	白、黑色 白	良好	外周 内側	四面ナダ。 内側四面ナダ。	—	—

B区H - 4

No	出土位置	種別、特徴	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
1	Na1 - 4 7 - 11 - 13 - 宝土	土器部 灰	20.2	—	(18.6)	黄石 白	良好	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
2	Na5	土器部 灰	(11.5)	—	(25)	黄石、白色 白	良好	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
3	カマド	土器部 灰	(11.6)	—	(4.4)	黄石、白色 白	良好	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—

B区H - 5

No	出土位置	種別、特徴	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
1	Na2	土器部 灰	10.1	5.9	(25)	黄石、白色 白	良好	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
No	出土位置	種別、特徴	底径	高さ	付属	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
2	Na2	灰	(9.7)	0.5	0.5	灰	—	—	7kg	—	—

B区H - 7

No	出土位置	種別、特徴	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
1	Na2 - 1 上杭1	灰	(10.6)	4.4	3.2	黄石、白色 白	やや 不具	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
No	出土位置	種別、特徴	底径	高さ	付属	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
2	Na2	灰	(4.2)	(3.0)	0.4	灰	—	—	42g	—	—
3	Na4	灰	(5.0)	(5.2)	1.9	砾石	—	—	56kg	丸柱あり。	—
4	Na5	灰	(3.1)	(2.8)	1.2	砾石	—	—	24kg	丸柱あり。縫合。	—

B区D - 2

No	出土位置	種別、特徴	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	焼成状況・備考	
1	寶土	灰	9.6	4.7	2.7	黄石、白色 白	良好	外周 内側	四面ナダヘラナダモード。	—	—
2	寶土	灰	(9.0)	(4.6)	2.6	黄石、粗石	良好	外周 内側	四面ナダ。	—	—

VI 発掘調査の成果と課題

本遺跡で調査した、古代道路のA区R - 1号道路状造構は、過去の調査で存在が確実視されており、牛池川の渡河地点である本地点の道路構造の把握が、今回の大きな調査課題となった。予想どおり現れた遺構は、牛池川の浸食崖を3m以上も開削した切通し状の路体と、砂礫敷きの強固な路面部をもち、隣接地点から勾配656度前後で牛池川へ下る斜路になっていた(Fig.16)。今日の発掘調査員に躊躇み深い、地山掘削における作業通路の斜路は、勾配30度を上限とし、15度以上は滑り止めを設けよとされるから(労働安全衛生法労働安全衛生規則第五百五十二条)、この道路状造構には、現代の水準にもかなう安全な登坂が考慮されたと推察できる。いわば“通行の質”を意識した道路構造なのだが、その意味を考えるに本区は狭い。そこで本章では、既調査例と比較しつつ、この道路状造構の巨視的な構造や帰属時期、性格について、若干の検討を加えてみたい。

Fig.16 A区R - 1号道路状造構の勾配

A区R-1号道路状遺構の周辺調査例 本跡に関連する遺構は、2000年に元総社宅地遺跡（※以下「宅地」）第11・12トレチで最初に確認された。蒼海城の堀跡の可能性が指摘されたが、一方で遺構上部に黒色土器塊を含む住居跡が重複するとの記載もあり、詳細は不明であった（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2000）。2008年には宅地11・12トレチに接する蒼海（14）5トレチでも同様の遺構が確認された。覆土にAs-Bが混入しないことから古代の「大溝」と判断され、上野国府城西端部との関連が指摘された（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2008）。続く2009年には、蒼海（21）27地点と蒼海（23）24地点で南北方向に直進する溝跡が確認された。出土遺物や重複関係から10～11世紀の年代観が与えられ、上野国府との関連が指摘された。（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2009a・b）。2010年には蒼海（30）で南北方向の道路状遺構が確認され、重複関係により7世紀以降から中世以前の所産と推定されている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2010a）。

2011年から始まった上野国府等範囲内確認調査（※以下「国府」）では、これら既調査例も「大溝④」として検討対象になった。蒼海（14）5トレチの隣接地点に設定された国府6トレチで「大溝」が再確認され、中層に硬化面をもつことが確認された（前橋市教育委員会2013a）。2012年には「大溝④」の北側範囲確認のため国府12トレチが設定されたが関連遺構は確認されず、中途で走向が変化ないし途切れる可能性も指摘された（前橋市教育委員会2013b）。2013年にはこれらの調査成果をふまえ、「大溝④」は「区画溝B」と改称され、北側を東西に向かう「区画溝A」（Fig.17右図a）との遺構形状の類似性から、国府12トレチの南側でL字に屈曲する同一の区画溝との推定案が提出された（前橋市教育委員会2015）。

国府調査による「区画溝」の検討が進む中、同一城内で進む区画整理事業に伴う発掘調査では、新たな事例も報告された。2016年には蒼海（17街区）で、蒼海（30）から続く道路状遺構が確認され、切通し状の路体をもち、北方の牛池川を渡河して山王庵寺の方向へ向かう直線道路の可能性が想定された（前橋市教育委員会2016a）。

ふまとて同年、国府調査では「区画溝B」が再検討され、上野国新田郡家の調査例を参考に、一連の調査例は国府域を南北に縱断する一筋の直線道路である可能性が指摘された。また同年には国府29トレチで溝跡が確認され、この付近を境に、溝幅が大きく変化することも指摘された（前橋市教育委員会2016b）。同様の溝跡は、2015年に国府40トレチでも確認された。同年の検討では、これら遺構群の変遷過程が検討され、各地点の埋

Table 4 関連遺構等一覧

地番	遺構名	位置名	全長	上幅	下幅	深さ	形状	走向方向	研究歴	測量	砂場	洗削	埋め戻し	大成山	裏塗跡	付帯施設	既認知跡	備考
1 蒼海 牛池川 付近	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6c 12年 12c 13年	丁字形の直線跡。 底面硬度強。 底面無機質。	
2 蒼海 (14)	A 14 (5)	W-560 H-30 W-50 S-110	南北状 屈曲	N-S-W N-S-W	屈曲下 屈曲	×	下屈曲	×	As-K As-B	本跡→津谷田跡 →中層・底面 →底面・屈曲・路 面	切通し・伏 面・底面・路 面・屈曲・路 面	手明 - 9m	手明 生垣跡がある 手明付近に古墳 あり(A付近 付近)	-	-	-		
3 蒼海 (17街区)	B-1	16.35 6.20 1.93	1.34	進行形跡	S-A-W S-A-W	下屈曲 下屈曲	×	×	As-K As-B	本跡→中層 →底面・路 面	切通し・伏 面・底面・路 面	Kc 既13年 12c 13年	既認知跡 溝跡2付帯あり(A付近 付近)	-	-	-		
4 蒼海 G-1	G-1 (23)	6.38 4.55	0.26	進行形跡	S-L-W S-L-W	底面下 屈曲	×	×	×	-	Tc 付近跡 →全部 →底面無機質	「既認知跡 底面・底面無機質 →底面・底面・路 面」	Tc 12年 12c 13年	既認知跡 溝跡2付帯あり。	-	-	-	
5 国府12 トレンチ	-	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	-	-	-	-	該当無なし。	
6 蒼海(14) トレンチ	-	-	-	-	-	-	中層	×	×	×	×	×	-	路床面	× 路盤	手明	表土直下に硬化層との変化。	
7 既認 トレンチ	W-32	1450 1.33	6.09	3.5	1.17	進行形跡	N-L-W	×	×	×	×	×	-	本跡→津口跡(時 期不明)	(埋め戻し)	手明 12c 13年	-	
7 既認 トレンチ	W-32	1345 1.25	6.08	1.50	1.17	進行形跡	N-S-W	×	×	中層	×	×	-	-	(埋め戻し)	国府 6トレチ W-2と一部連 続	-	
7 既認 トレンチ	W-32	1350 0.98	5.32	3.47	1.11	進行形跡	N-L-W	中層	上層	下屈曲	×	×	-	本跡→中層以降 →底面・路 面	既認1付 既認1付	既認 既認付近	既認付近	
7 既認 トレンチ	W-32	1223 1.25	6.09 0.99	2.09	0.90	進行形跡	S-Z-E	×	×	T層	×	×	-	-	(埋め戻し)	手明 12c 13年	-	
8 国府29 トレチ	W-2	6.89 2.75	2.40	0.57	-	風狀 進行形跡	N-L-W	×	×	×	×	×	-	本跡→底面無機質	-	手明 10c 前半	底面無機質なし。差走する 区画跡。	
9 蒼海 G-1	24.地 G-1	1413 2253	2.35	0.30	0.42	風狀	N-L-W	×	×	W-4b T層	×	×	-	本跡 W-4b→本跡 W-4b→底面無機質 →底面無機質 →底面	-	W-4a1b 12c 13年	既認2付帯あり。 底面無機質なし。差走する 区画跡 (21) 27地付 W-4に接続。	
9 蒼海 G-1	27.地 G-1	2253 2303	2.82	0.26	0.41	風狀	N-L-W	×	×	W-1a T層	×	×	-	本跡 W-1a→本跡 W-1a→底面無機質 →底面	-	W-1a1b 12c 13年	既認2付帯あり。 底面無機質なし。差走する 区画跡 (21) 27地付 W-4に接続。	
10 既認 トレンチ	W-1	1.09 2.15	0.26	0.35	-	風狀 進行形跡	N-L-W	×	下屈曲	×	×	×	-	底面(時期不明)→ 本跡	-	手明 12c 13年	既認2付帯あり。 底面無機質なし。差走する 区画跡。	
11 既認 G-1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	青森県跡の変動に伴うもの。	
12 既認 G-1	W-1	6.05 0.68	0.28	0.15	-	風狀 風狀	N-S-W	×	×	×	×	×	-	本跡→中层溝跡	-	手明 12c 13年	既認2付帯あり。 底面無機質なし。差走する 区画跡。	



Fig.17 A区R-1号道路状遺構の推定路線と関連遺構

没状況と硬化面の層位から、10世紀代に廃絶した区画溝の埋没過程に道路状遺構が形成され、その機能も As-B の降下以前に失われたとの変遷案が示された（前橋市教育委員会 2017a）。なお直近では、2017 年に蒼海（93）で溝跡が確認され、蒼海（21）27 地点から続く同一の溝跡と判断されている（前橋市教育委員会 2017b）。

過去の検討を概観するに、A 区 R-1 号道路状遺構の関連遺構群は現在、一連の道路状遺構と認識されている。一方、国府 29 トレンチ付近を境とする溝幅の規模差や開削の時期については検討の途上にあるといえる。

A 区 R-1 号道路状遺構の概要 本跡の詳細は V 章を参照されたい。ここにその特徴を挙げると、①路体の特徴 - A 深い切通し状 : B 箱状（上半漏斗状）の断面形、②路面の特徴 - A 砂礫敷き : B 緩い勾配 : C 新旧 2 時期 : D 路面最大幅 3m 前後、③付属構造の特徴 - A 側溝 : B 路盤（部分的）: C 波板状凹凸面なし、④路線の特徴 : A 牛池川へ下る、⑤時期の特徴 - A 開削時期不明 : B 10 世紀代に廃絶、⑥その他の特徴 - A 下層に As-B・As-Kk の一次の堆積層 : B 廃絶直後に砂岩採掘坑 と、まとめることができる。

地点 2~7 の共通点 上記特徴について、推定路線上の関連遺構と比較し、この道路状遺構の巨視的な構造を推察する。なお以下では、Fig.17 右の地点番号を用いて記述を進める。遺構名の対照は Tab. 4 を参照されたい。

まず、ほぼ同一の路面幅が推定できる地点 2~7 を比較する。地点 3 は本跡に隣接するので共通点が多く、側溝と部分的な路盤を備え、新旧 2 時期の路面部をもつ。路体は徐々に切通し状へ移行しており、本跡へ続く切通しの端緒部にあたる。ただし砂礫敷きは部分的で、本跡の砂礫敷きも、こうした部分的な路面補修に伴うと判断できる。同様の砂礫敷きは地点 4 まで点々と続く。

地点 4 も同様に、側溝と部分的な路盤を備え、新旧 2 時期の路面部をもつ。台地上を通行するため切通しはないが、路体は浅く窪んでおり「開削凹地型道路」（坂爪 2008）の形状をとる。地点 5 に関連遺構はない。しかし、宅地 2 トレンチでは表土直下全面に硬化面がある。層序から新しい時期のものとされるが、硬化面以下の層に As-B 混入に関する記載はなく、現在の認識状況を勘案し、再検討の必要もあるだろう。硬化面より下層にも掘り込みが存在し、あるいは路盤をもつ可能性もある。

地点 6・7 では再び切通しをもつ。側溝や路盤はもたず、硬化面は部分的で中層より上位に存在するので、当初は国府に開通する「大溝」の一部として開削され、後の埋没過程で道路として利用された可能性が指摘されるが（前橋市教育委員会 2017a）、その溝幅、底面の水平性、推定路線との位置関係を考慮するに、「大溝」と同時に、当初より道路としての機能を有した可能性もある。再び切通し構造となる点については後述する。

地点 8~12 の相違点 以南の地点でも関連遺構は確認されるが、構造に大きな相違点がある。地点 8~10 では、新旧 2 時期の溝跡が確認される。溝幅は地点 7 以北の路面幅に比べると狭い。硬化面は形成されず、断面形は浅い弧状で、底面の水平性も低い。路面部や路盤そのものとは考えにくく、むしろ「国字 C 案推定域」周辺の掘込地業建築物跡群（Fig.17 右図 b）との関連が強い区画溝ともいえる。地点 12 では溝幅も減少し、やはり路面部や路盤そのものとは考えがたい。溝跡の上層に硬化面が形成されるが、その層中には As-B を含む。

「道路」か「区画溝」か 本跡にかかる関連遺構群の性格は、道路状遺構と溝跡ないし大溝（区画溝）の二面性をもつが、この認識は地点 7・8 間を境とする遺構形状の不整合に起因している。

地点 7 以南の一帯は蒼海城本丸に近く、その地形変容の影響を強く受けた区域である（前橋市教育委員会 2013b など）。この区域内にある蒼海（65）では、周辺調査における遺構確認面の層序と現況地形、蒼海城縄張図（山崎 1978）の比較から、地形変容の具体が検討された。これによれば、本来の地形は牛池川や染谷川の流下方向と同様、北西から南東へ緩やかに下る台地だったようである（Fig.18、前橋市教育委員会 2016c）。

推定される旧地形を、本跡にかかる関連遺構群の推定路線方向へ三次元的に変換してみると、地点 4 と地点 7・8 間の 2箇所に、台地上の緩やかな頂部があることに気付く（Fig.17 中央）。中でも地点 7・8 間の頂部へ向かう地形変化は、地点 4 付近のそれと比べ大きく、この部分の路線の水平性を確保するために、地点 6・7 は台地上にも関わらず、切通し状の路体をもつとも推測できる。地点 6・7 以南の地形は緩やかに南へ下り、本来の地

形も変化に乏しいと推測できるが、蒼海城の地形改変による影響はとくに大きい。そのため路体は、切通し状の構造をもたず、本来は地点4にみられるような「開削4地型道路」ないしは平地状のような掘り込みの浅い路体構造であったものが、地形改変によって消失している可能性もある。結果、東側に付属する側溝や、側溝に共有された区画溝のみが残存し、現在の現象を作り出しているのはなかろうか。

本跡にかかる関連遺構群の推定路線は、直進性を保ちながら推定国府城を南北に縱断している。国府城周辺の「地割り」については、その推定プランや設定時期に関して議論の多いところだが（近藤1981、木津1999など）、このような線形をもつ道路状遺構が、その「地割り」と無関係とは考えがたい。「道」そのものが社会的に意味される境界性の問題や、古い絵巻物に残る道路の描写を引き合いに出すまでもなく、この一連の遺構群は道路状遺構であるとともに、強い区画性を本質的に有するのだろう。碑問答のようになつたが、ここでは開削の当初より道路であると同時に区画施設でもあった可能性を指摘しておきたい。

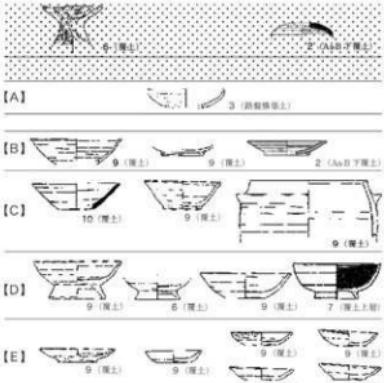
時期と変遷 一連の道路状遺構は、7世紀以降に開削され、12世紀初頭よりも前に埋没したことが把握されている。そこでここでは出土遺物の詳細を、既存の編年（鈴木1984、坂口・三浦1986、桜岡1991、群馬県埋蔵文化財調査事業団1997、尾野2008など）に振りつつ点検し、時期を考えてみる。

Fig.19には、この道路状遺構で出土した土器類のうち、器形の詳細がわかるものを集めた。【A】以前の土器群は他の土器群との時期差が大きく、周辺他遺構から混入したものだろう。道路状遺構に関連しうる土器としては【A】が最も古相を示す。北武藏型壺で口縁部は短く直立する。路面部より下層の路盤構築土内から出土しており、覆土出土の他の土器群よりも遺構への帰属性が高いものと判断できる。【B】は【A】との間に空白期間がある。いずれも灰釉陶器で、屈曲の強い口端部や短い三日月高台がみられ、光ヶ丘1号窯式期に相当すると判断できる。【C】の須恵器壺は口径に対する底径の比率が半分を切る。酸化焰焼成の高台付壺や羽釜とは時期的に共伴しうる。【D】には酸化焰焼成や黒色土器の壺と塊がある。黒色土器の塊は、地点7の上層から出土している。【E】には酸化焰焼成の小皿と灰釉陶器の稜皿がある。稜皿は、稜部の器形変化がやや不明瞭で高台はごく短く、丸石2号窯式期に相当すると判断できる。道路状遺構に関連しうる土器としては【E】が最も新相を示し、新田2時期の溝跡が重複する地点9に集中していることから、新段階の溝跡に伴う土器群と推測できる。ただし上記は、あくまで組成上の分類であり、残念ながら層位的に検証されたものではないことをことわる。

道路状遺構の変遷は、半数程度の地点に確認できる砂堆の層位と硬化面を鍵層として考えてみる。地点9では旧段階の溝跡に砂堆があり、その後に新段階の溝跡が再掘削されている。地点7では下層から中層に砂堆があり、その上層に硬化面がある。地点3では砂堆はないが、硬化面の直上にAs-Bの一次的堆積層が確認できる。そして地点2では最終段階の硬化面の直上に砂堆がある



Fig.18 蒼海城築城以降における地形改変の想定 6～9地点付近



*番号はFig.17・Tab.4の地点番号を示す。(S=8)

Fig.19 A区R-1号道路状遺構と関連遺構の出土土器

が、As-B 降下までの間に堆積土が形成されている。なお、同様の砂堆は、自然の流路と判断される蒼海（27・28）W-3・15にも堆積しており、この溝跡は10世紀後半の住居跡を破壊し、12世紀以降の溝跡に破壊されている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010b・c）。

これらの点を総合するに、この道路の開削は古く見ても8世紀前半を廻ることはないのではないか。主な使用期間は9世紀後半から10世紀後半と推測でき、その後、洪水などに起因するとみられる砂堆の影響によって、A区R-1号道路状遺構のある牛池川渡河地点付近は放棄され、砂岩採掘坑に転用されている。1968年の米軍撮影航空写真（『109V82RSP R1250 71G 6APR48』）を参照すると、渡河地点は西へ30m程度移動し、現在の「薬師橋」付近に切通しがみられ、渡河地点そのものの変更が想定できる。台地上では水害後も路線が維持され、再び硬化面が形成されたり、側溝ないし側溝を共有する区画溝が再掘削された可能性がある。道路としての本来的な規模は、As-Bの降下を待たずして11世紀代には失われていたと推定できるが、部分的にはAs-B降下後にも硬化面が確認でき、ある程度の期間、道としての機能は維持していたものと想定できる。

小結と展望 本遺跡A区R-1号道路状遺構は、登坂容易な斜路と強固な路面部を特徴とし、関連遺構群の構造を巨視的に概観しても、路線の水平性や平坦度を強く意識した設計意図がうかがえる。「切通し状」や「開削凹地型道路」や「大溝」は、その意図が地形的制約を克服しながら具体化されるにあたっての形態差と捉えたい。こうした水平性がもつ意味については、それ自体を中央集権的な統治機構のもつ観念を具現化する「装置」と見る解釈がある（坂爪 2008）、本章では現実の通行面に限って展望しよう。太田市の上強戸遺跡群では8世紀中頃の車輪部材が出土しており（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009）、該期にはすでに車両の利用が確認できる。車両の通行には、人馬そのものに増して路線の水平性が問われよう。該期の車幅は、轍痕跡の分析では1.0～1.8m程度とされ（竹井 1996）、3m前後の路面部幅をもつ本跡は充分に通行可能といえる。文献では、乗車は8世紀末から9世紀にはじまり、それ以前は荷車としての軍事利用が専らで、牽引は主に牛であったと指摘される（松本 1991）。ちなみに、蒼海（121）では10世紀の埋没谷から牛の下顎骨が出土しており、こうした蓄力として重宝されたものなのだろうか（前橋市教育委員会 2017c）。奇しくも、A区R-1号道路状遺構が渡河する川の名は「牛池」である。この地名は国府関連地名として議論される一方（近藤 1981、川原 2011）、「ウシ」地名には幹線道との関連性も指摘される（坂井 1989）。ともあれ、国府城という地勢とその流通・経済機構の維持において車両は有用で、本跡のような道路の設計意図にも、その通行が意識された可能性はある。そしてその交通路は、北は山王庵寺西側の南北古道、南は「日高道（上野国府南面古道）」（近藤 1981）に接続し、群馬郡域の広域的な南北交通路の一端を担っていた可能性すら想定されるのである。

蒼海土地区间画整理事業も進み、本章で論じた古代道路にかかる調査予定地点もいよいよ少ない。限られた調査地点の有効な記録調査に、推測の多い本考察の反証を託し、展望としたい。

付記 元總社蒼海遺跡群（141）R-1号道路状遺構砂礫敷き 磨の同定

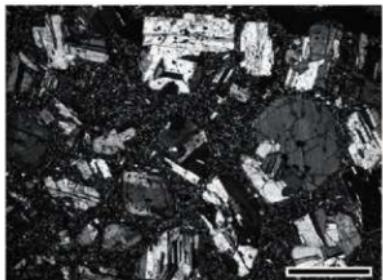
中島啓治・中村正八・吉川和男・閔 茂雄

岩石顯微鏡写真は、対物レンズ4倍を用いた（fig.20）。

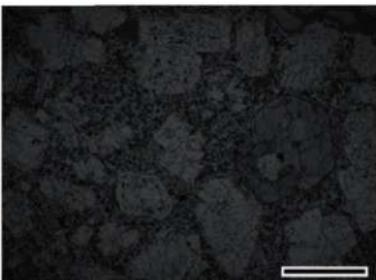
砂礫敷き2は、火山岩石礫中の微小空隙中に二次鉱物が形成される特徴から、赤城火山の起源と考えられる。例として、鈴ヶ岳などが挙げられる。

砂礫敷き6は、角閃石の周縁にオバサイト縁が見られ、新條名火山の起源と考えられる。例として、二ッ岳などが挙げられる。

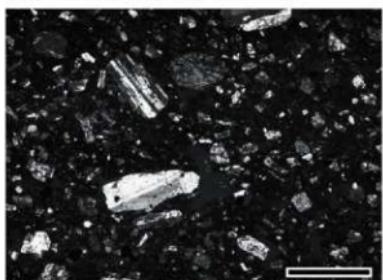
その他については、起源は定められないが、磨の大きさや形状からは、前橋台地の地下に拡がる前橋泥流（浅間火山）からの可能性もある。砂礫敷き3・4など。



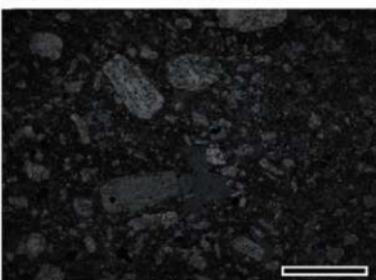
A区 R-1 砂礫敷き 2 直交ニコル スケール 1 mm



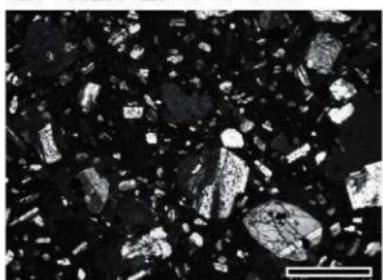
A区 R-1 砂礫敷き 2 単ニコル スケール 1 mm



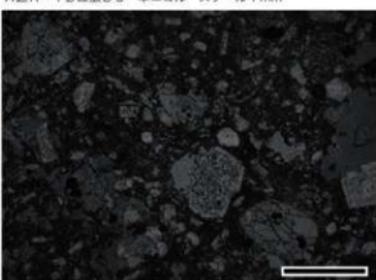
A区 R-1 砂礫敷き 3 直交ニコル スケール 1 mm



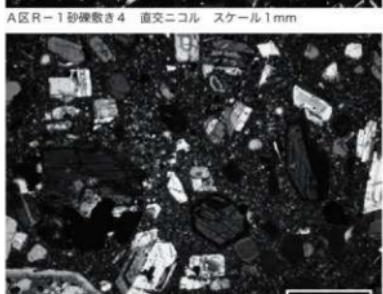
A区 R-1 砂礫敷き 3 単ニコル スケール 1 mm



A区 R-1 砂礫敷き 4 直交ニコル スケール 1 mm



A区 R-1 砂礫敷き 4 単ニコル スケール 1 mm



A区 R-1 砂礫敷き 6 直交ニコル スケール 1 mm

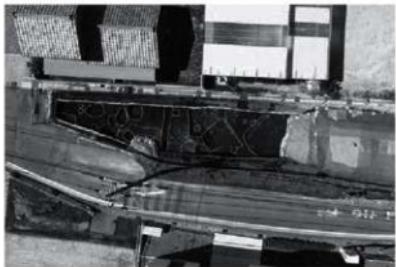


A区 R-1 砂礫敷き 6 単ニコル スケール 1 mm

Fig.20 A区 R-1号道路状造構砂礫敷き 偏光顕微鏡写真



A区 全景（上が北）



B区西半部 全景（上が北）



B区東半部 全景（上が北）



A区H-1 全景（南西から）



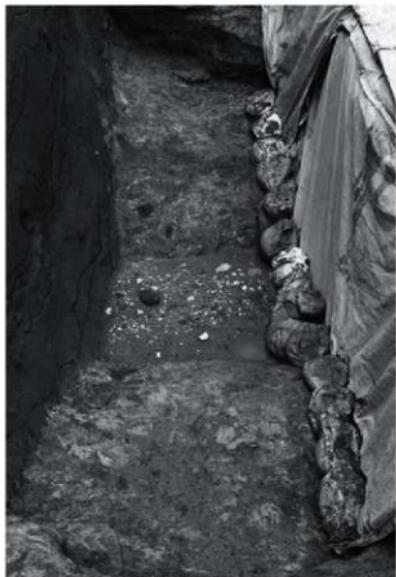
A区H-1 カマド 全景（南西から）



A区H-2 全景（北西から）



A区H-3 全景（北東から）



A区R-1路面②(新段階) 検出状況(西から)



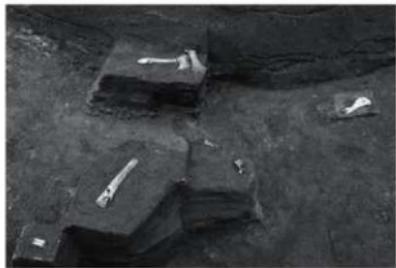
A区R-1路面①(古段階) 検出状況(西から)



A区R-1西壁中段平坦面 検出状況(南東から)



A区R-1東壁中段平坦面 検出状況(南西から)



A区R-1 Aa-Kk直上馬骨 出土状況(南から)



A区R-1 調査風景(北西から)



A区R-1路床 検出状況（西から）



B区H-1 全景（北から）



B区H-2 全景（西から）



B区H-2カマド 全景（西から）



B区H-3 全景（北西から）



B区H-3カマド 全景（西から）



B区H-4 東半部 全景（南西から）



B区H-4 西半部 全景（北西から）



B区H-4 カマド 全景（西から）



B区H-5 全景（北西から）



B区H-6 全景（西から）



B区H-6 カマド 全景（西から）



B区H-7 全景（南から）



B区D-2 全景（南から）



A区 調査風景（北東から）



報告書抄録

ふりがな 書名	もとそうじやおうみいせきぐん (141) 元総社蒼海遺跡群 (141)							
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	中村岳彦							
編集機関	技研コンサル株式会社							
	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1-15-3							
発行機関	前橋市教育委員会							
	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4							
発行年月日	2020年10月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	位 置 北緯 東経	調査期間	調査対象面積	調査原因	
元総社蒼海遺跡群 (141)	前橋市元総社町 1811-3、1812-1、 1860-1、1860-2、 前橋市總社町總社 3090-4、3090-9、 3090-10、3090-12、 3090-13、3091-1、 3091-2、3091-3	102016	2A255	36° 23' 31"	139° 2' 12"	2020.06.12 ~ 2020.07.20	559m ²	前橋都市計画事業 元総社蒼海土地区 画整理事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
元総社蒼海遺跡群 (141)	集落	古墳時代	住居跡 3軒	土師器 (長胴壺・坏・高坏) 須恵器(蓋) 土師器(長胴壺・坏) 畿内系暗文坏				
		飛鳥時代	住居跡 3軒	B区H-3号住居跡の覆土中から、 飛鳥Ⅲ～Ⅳの畿内系暗文坏(平城 宮分類坏A)の繊片が出土した。				
	交通	奈良時代	道路状遺構 1条	灰釉陶器(段組) 須恵器 (壺・坏・小皿) 瓦(丸瓦・平瓦) 鉄製品(刀子)・鉄滓 砥石 貝果穴痕軟質泥岩 獸骨(ウマ)	推定上野田宿城を南北に縱断する 道路状遺構の一部である A区R-1 号道路状遺構は、周辺調査例の檢 討から、奈良時代に開削されたと 推測できる。牛滝川の渡河地点に 向かって下る。切通し状の路幅を 備えた斜路で、10世紀代に廃止す る。			
		平安時代	住居跡 土坑 ヒット 4軒 6基 8基	鐵製品(刀子)・鉄滓 砥石 貝果穴痕軟質泥岩 獸骨(ウマ)				
	集落							
		中・近世	道路状遺構 土坑 ヒット 1条 11基 19基	獸骨(ウマ)				
	交通 その他							

元総社蒼海遺跡群 (141)

前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年10月15日 印刷

2020年10月30日 発行

発行

前橋市教育委員会文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4
TEL 027-289-6511

編集
印刷

技研コンサル株式会社
朝日印刷工業株式会社

